



飛州志

七

共拾

ル 4
5009
7



門 4
號 5009
卷 7

飛州志卷第七諸雜部目錄



人事

度市參

歩荷

俗道場

踏歌

栽田歌

採田伴歌

轉磨歌

轉木磨歌

踏碓音節



春未醬歌

吉左右踊

鳥追

鳥毛打

食物

令法

薯蕷

酸菜漬

粽飯 并 名品

粥 并 名品

炒粉 并 名品

餃餅 并 名品

錄中目

雜炊 并 名品

糕 各品 并 團扇 餅 附 飛驒 餅考

自然梗

玉末醬 并 博團末醬 附 飛驒末醬

搥込

諸品

著御類

器用類 并 名品

農具類 并 名品

國匠用具 并 名品 私人用具 并 名品

機子 并 名品

機絲用具 并 名品

諸説

地名訛轉

大師饅餅附大師粥考

木呂并搦

保木

ニウ附品

重食

生食附産附磨墨之字解

若木迎

管粥

天狗怪説

沼突沼坪之説

芭荊萱釋設萩葉河蟲等變化之説

蛇蟊鼠之説并鼠溺死之沙汰

墓合戦

消火獸并茂住之夜火附天狗倒

飛驒黒坊之説

熊膽之説

佛法僧鳥附嶽鳥

雷鳥附嶽鳥并雷鳥雌雄圖

捕詔言語

民間月令

温故

祠跡

寺跡
 舊宅
 古窟
 古墳
 古瓦
 國士姓名黨類并敘傳有無附黨類未考之云
 高山番城元代之式

飛州志卷第七 諸雜事

人事

○度市參

本州モトヨリ山國ナレハ鹽ナシ仍テ自他州ノ民越宇美濃ノ兩國
 ヲリ鹽ヲ牛ニ負セ此國ノ市肆ニ來リテ買フ者ノ總名ヲ度市參
 ト云ヘリ其市肆ニ於テ鹽ヲ預リ賣出スモノヲハ度志參屋ト云イ
 度志參宿ト云フ也是佗州ノ鹽問屋ト云フニ同シ 按スルニ一月六次
 三度ノ市ヲ為スハ古代ノ政治也其度毎ニハ遠近トナク民ノ多ク
 向ヒテ高フニ古昔ハ塩ノニモ限ルヘカラス外ノ賣物モ交エタラシ
 テレモ山國ニテ其重シムルモノヲ先ツ云フトテ鹽ノ賣ノニ成リ
 來レルカ六度三度ノ市ニ參ルト云フノ畧語ナルヘシ

○歩荷ホツカ

本土ノ隣國ヨリ一已イツコノ買人何ニヨラス賣物ヲ持来ル其背ホイタン擔カヲ云フ也 振スルニ歩荷ホツカト云フ又又背荷ホイタント記リナルカ背ホイタンハ背身ホイタン衣ホイタンノ背ト同レ 捧ホイタン倍其品物ヲ收ムル器ヲニナイト云フ 荷ホイタンナルヘシ

○俗道場

本土ハ東西本願寺常ノ寺坊多シ寺号或ハ坊号ヲ稱スル中ニ其主俗躰俗名ニテ法用ヲ務ム村里ビレカ檀家ノ民アツテ代々相續スルヲ俗道場ト云フ也或ハ毛坊ケボウス主ケボウス云ヘリ道場ハ宗旨ノ通稱タリ

踏歌

○栽田歌

本土ニ於テ稻苗ヲ栽ルウツ片奴婢ノウタフ歌也其ウタ多ク急クワシキウエシ延シアツテ一般ナラズ是上田ハ苗ノ數少ク栽ルニヨリテユルク静也下田ハ

苗多ク繁ク栽ルニヨリ早クツメテウタエリ其章句ヲ載スガ古来ノ章句多シト云ヘレ 唯其一ニヲ挙ルノ以下可唯知也 ○廣瀬殿

御出ト云ハ、地モユルケ木草モナビケ 所領モナビケ 按スルニ性古吉坂郡廣瀬山城守ト人アリ是人ナル ○此歌セ所ト能ク栽テ誓ニトク々ヨ誓モケコエ誓ニト云フセヨ 按スルニ田町ハ田島ノ區界ナリ ○箏ウタハアラトハ果ハテ奥ハ今盛リ 按スルニ性古吉坂郡凡テ其地ノハシ

子ココロリトスカイテ田ノハカバユカ又 按スルニ壹行ニ作ルシ温古要集卷第ニ曰古書曰昔行基菩薩、在世ニ墓ノ石塔ヲ移シニ ○田ヲ栽ルニ思持ハイマヨ見カケハ 畷ハ上へ走りエリ子コ

ノ上ニドウトコロビ貝ヲシマントホワリテウラメシノ嵩ヤ 按スルニ萬葉和歌集ニ山畷ノ腰ニツケタルホラノ貝岩尾ノ上ニホトラチナトワレ ○伊勢編ハフリニヨマ

松ニモヨマ 按スルニ性古ハ專ク勢州ヲ用ヒタルニマ ○田ハ栽タレト田ノ畔ハトラセマイ田湯

ノアカルニ 按スルニ盛夏夏首田ノ水温湯ノ如シ ○ヲカタ出テ見ヤレカノコ山ヲカノシガ兜

モヨバ 聲 按スルニテカマハ 婦妻ヲサシテオフ 俗言也何ノ 御方トキフヲ尊卑ノワキミナリ 誤来ルナルヘシ

○採田草歌

本エニ於テ 稻苗ヲ裁テノ後田ニ生スル水中ノ草ヲ採ルニ奴婢ノウタウ 歌也一番草ニ番草等ノ名アリ他州ト同シ ○採モナラハテ田ノ草トハ 跡ニ山草カチリミト ○富士ノスツ野ノ一村薄イツカ穂ニ出テミタアア

○轉磨歌

本エノ民家ニ於テ常ニ磨ヲヒクキウタウ歌也 ○君ハ白玉千重ノ海邊 見レハ折タシチキリタシ ○備モ見直テ上呂ノツシ枝ハ宮田ニ葉ハ 萩原ニ花ハ中呂ノ寺ニ咲ク 按スルニ上呂中呂宮田萩原等皆益田郡ノ地各ナリ 中呂ノ寺トスフハ益田郡山澤山禪昌寺ヲ云フカカ古跡ナリ ○廻シクハ古川遠ヤ間ノ横山石ナカ能カク 按スルニ往古大野郡中ヨリ吉 城郡古川郡ニ行ノ道路ノ中 間ニ大岩アリ横岩ト云フ故ニ此 山石壁ヲ廻リテ山道アリ其ヲ 云テテルニ然レテ天正年中此岩ヲ 切開キテ今世ノ道ヲ作レリ

○轉木磨歌

本エノ民家ニ於テ救ヲヒク ウス 磨也其時ウタウ歌也 ○郡上ノ八幡出テ表 ルトキハ雨ハ降ラ子ド 簑纏 按スルニ濃別郡上ニ八幡 所アリ他州ノ隣國ナリ ○コフトユタリマコマ イトユタリ心カリノヌル殿ヤ 按スルニユタリハイノタリノ 誤リカ又イトユト通ス ○益田能イヨノ奥飛 驒ヨリモ風ノ嵐ガソヨミト 按スルニ益田郡ハ州内ニ於テ暖氣ナル地ナリ 眞飛驒トハ 大野吉城兩郡真山中ヲサシテ至リ至寒深雪ノ地ナリ

○踏碓音節

本エノ民家ニ於テ用エルフミウス也其時ウタウ歌也 カラウス歌ト云フヘキモノ 也音節ト按スルヲ未解

○フミモ習ハヌカテウスフメバ汗カタルトノシンドクミト 按スルニシニハ律ノシニ ンハ流兒也軒ノ五水トク カウルヲフメトクミト

○竹相根七里ハ馬デモ越ガコスニコサレヌ大江川 按スルニ 根ハ東海道ノ難所也他州ニテモ馬奴ノウタウ歌トスルヲハ同シ七里ヲ八里トウタヘリ 行程ハ八里ト称ス ル地ナリ馬ヲモ駕テモトウタウ彼地ノケハヒキニ應ニテハ駕ガモノ言葉ヨロシカルヘシ大江川ハ大井 川ヲアマニ ルナルヘシ

○春未糴歌

本エニ於テ食用ヲ糴ヲ製スル片ウタウ歌也 ○コレノヲヤシハトリ

ノ年羽カエカサ子テラメレタヤ 按スルニ未詳ヲメシタヤハ衛
目出度ト云フノアヤマリナルマ ○是ノ末裔
ツキアラケナマヘタヲ扣ケハ飛ビテ出ル 按スルニハタハ端也古歌ニニナシロモハタ
ノミルヲ思イタケトアリ又與タヒハタリ

○吉左右衛門

本五高山國府ニ於テ毎歲七月下民ノ小兒男女ニ遊ヒトスル踊也
今ノ俗キツソ踊或ハキリ踊トモ云ヘリ皆吉左右衛門ノ誤ナリ末曾踊
ハ信州木曾ニアリ隣國ナレハ其名混ゼレモノナラン 按スルニ是文祿
年中豊臣家朝鮮征治ノ時舊領主金森法印父子肥前唐津ヨリ此州
陣セリ然レニ朝鮮ニ至ル処ノ日本ノ諸將速ニ勝軍ノ吉左唐津ヨリ此州
ニ告来レリ 于時文祿元年壬辰三月朝鮮
國遼東ノ季子ヲ擒ニセリト 仍テ下民是ヲ祝シテ悉ク高山ノ
城下ニ群衆シ踊歌セシヲ濫錫トス俗ニ吉左右ノ告来ルト云フヲ以テ名
トスルモノ也自是毎歲七月七日ハ高山ノ民同郷國分寺ノ境内ニ集
リ踊レリ同十五日十六日ハ高山國府於テ踊ヲイタス古来用ユル処ノ

又宮天窓
ナルハ

章句ヲ載ス ○雪夕ツ鳥ガ日本ヘ行カ言傳シヨモノ又副テ 按スルニ朝鮮
在陣ノ意ヲ

○天ニ照ル月ハ十五夜カ盛リ我カ君サマハイツモサカリ 按スルニ豊臣
家ノ子ヲ云

○御寺サマノ御門ニ鶴カ巢ラカケタ鶴千手ト 按スルニ本願寺宗照蓮寺
高山ニアリ其時ノ住持ハ

○思ヒモヨラヌリフダニ出ヨテモロタヨ知行五千五百石 按スルニ
解

○小豆餅ニ砂糖ツケテフクサニツツ、テフツツケテヤリタマ大野至馬殿へ 按スルニ大野至馬ハ
豊臣家ノ長臣ナリ

○コクダジテ踊レハラク今ノガシカルヲノケガサイハ子ヲ 按スルニ又窓ヲ下俗
サレバナト云フナリ

○シント口トミト眠ル眼モイトシトリラケテゴケ 按スルニ鹿子目
結ハ漆色ノ名也

○今宵モ鹿子アスノ夜モカノコメシカテエテヨサレ

○鳥追

本五ノ村里ニ於テ正月十四日戌ノ刻下民谷其田畑ニ出テ行フ耕作ノ
呪ナルト云ヘリ古昔ハ州内一披ニ行イタリシト云ヘ今ハ其支絶テ無シ
来由未分明ナラス

○鳥毛打

本エニ於テ神夏祭禮ノ時下民是ヲツトタル也神イサメント云ヘリ 按
スルニ其人數ハ宛リナシ各鷄毛ヲ被リ赤白ノ紙ヲ切り斬子ヲ背
ニ負イ鞆或ハ鉦ヲ頸ニカケ笛ヲ吹テ舞踊スルヲ鳥毛打ト稱セリ
是他州ニ於テ鷄毛ヲウエタル木獅子ヲ被リ頸ニ鞆敷ヲカケ笛ヲ吹
テ踊舞スルヲ我後獅子上總獅子ナンド、云ヘリ其木獅子ハ廢レ毛
バカリヲ被リテ又鉦ヲ加フルト成レルモノカ東武等ニテ今世其伎
ヲイタスヲ角兵衛獅子ト云イテ由見ヲ慰ムルトセリ鞆敷獅子
云フキヲ角兵衛ト云フモノ是ヲツトシ始メケルニヤ

食物

令法

本エニ於テ下民ノ飯ニ和テ喰フ處ノ木ノ葉也令法ト云イハタツモリト

稱ス 按スルニ凡テ此木山林ニ多シ令法ノ木ト云フ大木ニハ至ラス其木
ハ山躑躅ニ似タリ其葉ハ木天蓼多ノ如シ春三月ノ末四月ノ初ノ若葉
ヲ摘採テ温湯ヲロケテ日ニ干カシ後是ヲ藏メリ則チ穀ニ和テ喰フ
ヲ糧飯或ハ夫食ト云ヘリ厚味ニハ非サレ氏食イ安キノ賤食タリ
或曰令法ト云イハタツモリト假訓シテ知レ難キモノニ云ヘリ蓋シ昔葉也
タハ助字ニテ天津國津ノ類ナルハ昔昔山國ノ戸數ニ命令シテ葉ト
芽トヲ摘シ是ヲ倉ニ收メ置テ軍用飢饉ノ貯トセシ政法アリシ古又ヲ説
轉シテ令法ト成リタルモノカ ○新六帖 衣笠内大臣 里人マ若葉摘ヲ
ニハタツモリ外山ニ今ハ春ノキニケリ 俊頼朝臣 奥山ノ草隠レナルハタツ
モリ知レヌ戀ニマ迷フコロカナ ○能因法師家集 令法ト云フモノ
ヲ見ヨタルニカク云ヤリケル 今ヨリハ深山カクレノハタツモリ我カウチ掃

ノ床ノ各ナレヤ ○藻塩草知ラヌニウキナル山ノハタツモリハタツモリ
行ツニハ悲シキ ○倭漢三才圖會八十三擗ノ條下曰波大豆 波大豆
毛和 其材似擗今多用澤胡批或波大豆為板偽擗下略 按ス
ルニ此説ノ如キハ大木ニモ至ルモノカ

○窶藪

木也ノ山澗ニ木ノ極ニ自然ト生スルモノアリ是ヲホヤト云 按スルニ
木ハ枳殼ニ似タリ香キ由孕多ク葉ハ少ク黃實ヲ結ヘ、其實ヲ鳥
ノ食イテ糞ニ落シタルモノ木ノ極ニ止リテ生スルトニエタリ何レノ木ニ
ハ限ラレレハ或ハ擗ニ多シ下民是ヲ雜穀ニ和テ食フ也夫食ノ一種タ
リ民ノ是ヲ食フニハ其木其實ヲハ捨テ枝葉ハカリテ湯デ、水ニ晒シ
白手張シ春テ後雜穀ニ和テ粥或ハ饅餠トナシテ食ヘリ能ク製
セサレハ甚タ酸シ其性至冷ニシテ久シク食ヘハ其面色青ク成リ必ズ

浮腫ヲ生セリ故ニ窮民暫時ノ飢餓ヲ助アルヘキノ為ニクテフ而已

○椶草紙春曙抄曰ヤトリ木註曰 寄木 二光殿ノ御説コト木ニマ

トリタルヲ云ナリ 花鳥雜情ニハ木ノ窶藪ト云モノ也葉寄生ノ類ト云云

○藻塩艸ニヤトレル由ヤ 以上 按スルニ此州ノホヤト同種ナルヘシ又

五葉集ニホヤノノクノ土佐日記ニホヤノツマズシト出タリ是等ハヤド
リ木ノホヤニ非ズ別物ト見エタリ

○酸菜漬

本州ノ民間ニ於テ常用スル処ノ國方ノ菜漬也古来夫食ノ一助タリ
按スルニ毎歲冬十月初ノ夜ノ日ヲ以テ專トシ菜園ヨリ菜ヲ採リ
水ニテ洗い温キ湯ニヒタシ其湯氣アルモノヲ掃ニ詰メテ重石ヲ置ク
常例ノ漬物ニ同シ塩ヲ和セサルニヨツテ其味酸シ故ニ酸菜漬ト云ヘ
リ他州ニ於テハ芋大根ノ兩種ヲ多ク作り出シニ夫食トセリ此州ハ

芋熟セス大根アリト云ハ元澤西至寒ニ朽腐リテ貯ヘカクシ仍テ此菜漬ヲ以テ夫食ノ軍需ニタルモノ也在湯ダ、生菜ノ代リト成シ或ハ其漬汁ニ塩ヲ加ヘテ食用トセリ又其餅ノ漬物モ無キハ非ス間嗜ミ造ル事也

○糲飯 并名品

本五ニ於テ下民ノ食用具物々ノ一種ヲ食ニ非ス二種モ三種和テ飯トスルヲ糲飯ト云ヘリ其和ルモノハ五穀ヲ最上トス勿論也猶貧家ノ賤食ニ至ツテハ何ト云フヘキ名モアラサル也今載ル処ノ名品主トカスモノヲ云ヘリ以下可推知之也

- 糲飯 糲ヲ皮トモ確ニテ
- 割飯 糲ヲ皮トモ確ニテ
- 菜飯
- 糲粉飯 糲ヲ皮トモ確ニテ
- 糲飯 糲ヲ皮トモ確ニテ
- 小豆飯
- 令法飯
- 芋飯
- 粟飯
- 角豆飯
- 大根飯
- 粟飯
- キラス飯 豆腐ニ煮リタル

○カラコ飯 小麦ヲ粉ラトリケル

○粥 并名品

本五ノ下民凡テ白粥ト云テハ精米一種也其餅ハ何ヨラス和テ用ルヲ糲飯ト同シ

○燕粥

○粟粥

○枳粥 枳ノ實

○小豆粥

○糲粥

○炒粉 并名品

本五ノ民間ニ於テ火ニ焙粉ト成シテ食フヲ炒粉ト云フ香泉ト同シ是諸ノ實ハカリヲ用ルニハ非ス其皮ハニ食用トスベキタメニ焙リテ粉トスルモノ也

○糲炒粉

○枳炒粉

法柿ヲ白ニテ搗碎キテ能ク日ニ

○麥炒粉

○シイナ炒粉

米ノシイナ也其ヨリ浸シ出タル

○枳炒粉

枳實也ヨク水ニ満シ日ニ

○饅餅 并名品

本五ノ民間ニ於テ米饅餅ハ精米一種ヲ用テ其餅ハ雜炊ト等シク何種

毛和テ用ル也

○朱餃餅

○赤餃餅

○蕎麥餃餅

○稗餃餅 ○麥餃餅

○葛餃餅 葛ノ粉ハツリテ用ルニテハナシ其トモニツキ碎キテ用ル

○蕨餃餅 ワラビ ○榴餃餅 ナラ

○野老餃餅 トコロ

○百花草子餃餅 百花草ト云其根也用ル

ト葛蕨ト同製ナリ

○カタコ餃餅 カタコ百花草ト云食用上同シ

○ジ子ゴ餃餅 竹實ナリ

○婁敷餃餅

○キラス餃餅 豆粉ニ包シ大豆ヲ摺也蕎麥ノ粉ヲ和ル

○雜炊 并 名品

本上ニ於テ下民賤食ノ終リ也飢ヲ養フニ至ツテハワレト云フヘキ名モ稱シ難シ更ニ鹽ノ味イアルヲ以テ食ト成レルモノ也

○蕪雜炊

○夕顏雜炊

○酸菜雜炊

○雜炊

○大根雜炊

○糕 名品 并 團扇餅 附 飛驒餅考

本上ニ於テ糕ト稱スルモノ、名品ヲ載

○餅

○苺餅

○栗餅

○黍餅

○苜蓿餅

○蕨餅

○ボタ餅

○粥餅

○芋餅

○蕎麥烙餅 ワラビ粉ヲ和ル

○和餅 和實也茶ノ粉ヲ和ル

以上其製他州ト同シ

○團扇餅 本上ニ於テ古來食物ト稱セリ

梅スルニ一般ノ習風トシテ冬春二季ハ是ヲ調味シテ朝飯ノ代リニ備ヘリ是

民秋成ノ後若麥粟稗黍蕎麥大豆小豆苳豆蜀黍ヲ初メトシ其餅ハ

物ノ糟物ノ殼マテモ集メ置キ旧ニテ挽雜其粉ヲ水ニテ練テ形ヲ扁

ニ作り湯デ、竹ノ串ニサシ串ヲ留テ茶ヲ奠スル爐火ノ周ニ立テ

焙リ食フ也也亦粟麥大豆ノ多ク和セルハ厚味ト可謂莫ニ棄ル

ヘキヲモ棄サレハ民間ノ古實ト見エタリ

○新猿樂記 大江明衛作 曰

飛驒餅 鎮西餅 梅スルニ飛驒餅ノ一今世此州ノ人モ其名ヲタニモ知ラス疑フラクハ團扇餅ノ変歟

○自然梗

シ子シコ竹實也諸州凡ニ名同シ本上ニ於テ正徳ヨリ享保ノ初ノ山巻

ト云ヘル竹ニ實ヲ生セリ 後年竹ハ悉ク枯レヌ其山筵ハ他州ノ矢筵
ニ似テ中竹也葉ハ熊笹ノ如ク廣ク大キナルモノニテ山中ニ多シ此時
其實ヲ下民爭ヒ採ツテ夫食トスト云フ 按スルニ其時ノ竹實ヲ民ノ
貯ヘタルアリ今世見ルニ麥粒ノ如シ則麥ノ如クニ春テ皮ヲ去リ挽テ
粉トナシ饅餅トスルニ潤ナクシテ食イ惡シ仍テ米ノ粉ヲ扣テ饅餅ト
セシカハ味ヒハナカリシカドモ食イ安カリキ享保ノ初メハ諸州凡ニ竹ニ
實ヲ結ビ竹モ枯タリト云フ各年ヲ同シテ可詔ニヤ ○或曰ク自然瘦カ
冉典初テ其種子モヲロサズ耕草キル事ヲモセサルニ米粒自然ニ生
ス是ヲ自然ノ瘦米ト云フ夫ニ似タルトテ名ツケタルモノカ ○惠愚隨
筆外類羣書
故事大全 曰竹木子曰竹花ヲ復實ト云フト云ルヲ約竹易報
而枯死ト云フ
六十年ニ一度根ヲ易シ時ハ實ヲ結ヒテ枯ルヌ ○本草綱目陶弘景曰有
實狀如小麥可為飯食雜阿含經世尊偈曰芭蕉生果先竹芦實亦然

以上 趙德麟曰竹六十年復紮所而以子種六年而復以上 韋凱之
竹譜在漢魏菴
書之中 曰竹將枯花復乃懸結紮必六十年復亦六年註曰生花實其
年必枯復實也土復生六年遂成町復音福紮音紮竹譜死為紮
以上 揚旻菴曰李旼該聞集曰舊稱竹實為鸞鳳所食今道竹間
時見花開如棗結實如麥江淮歸為竹米以為荒年之兆其竹即死
信非鸞鳳之食也

○玉末醬 羊搏團末醬飛驒末醬考
本五常用ノ末醬也凡テ麵ヲ和セス作ラ國方ノ玉末醬ト云フ 按ヌ
ルニ其製法ハ春三月中旬ニ至リ大豆ヲ蒸シテ臼ニテ春鞠ホトニ九
ノ是ヲ家屋ノ常ニ火ヲ焚処ノ上ニ簀ヲシキ是ニ并ヘテ凡ニ十餘日
ホト干テ其ヨク乾キタル片又臼ニ入レ搗碎キ是ヲ國名末醬粉ト云
フ此碎粉一斗ニ塩四升ノ水八升ヲ以テ合メテ桶ニ入ル也石數ノ多

少用ニ此法ヲ闕ス其後搥廻ス^ト醬油ヲ造ルニ同シ夫ヨリ五六十日
ヲ經テ紙ク熟シタルキ桶ノ中ニ篲ヲ入レ溜^リヲ汲取テ其跡ヲ常用
ノ未醬トスル也又一右檜玉未醬ト云フモノアリ國方ノ下品トセリ
是ハ米ノ糠ヲ湯ニテ練蒸シテ丸メテ身乾キタルヲ搗碎マテ悉
ク大豆ノ製法ノ如クニイタシ此糠ヲ本方ノ大豆ノ生醬糝一本ノ中
ニ升或ハ三升ヲ加ヘリ其餘鹽水^ニ法ノ如シ溜^リヲ汲取リ露^ヲ
常用ノ未醬トセリ取註ハ大豆ノ分量ヲ裁シ可造ノ為ニテ味を本方
ノ未醬ニ及ハサル也是ヲ國名檜玉未醬ト稱セリ ○或曰搗團未
醬玉搗團也俗玉未醬ニ作ルハ非也今世本出ニ於テ檜玉未醬ト云
フ亦解搗團ハ搗團ナレトタマ^ト讀解セリ搗ト檜トハ字別ニ音モ又
異ナリ疑ラクハ搗ヲ誤リテ檜ト成タルモノカ玉未醬諸州ニアリトイ
ハ搗團ニ作ル^トナクテ過ル古往今來也 ○和名類聚抄卷第十六

未醬之註曰赤質未醬 飛驒未醬 志賀 江州郡名云云以上 按スルニ
飛驒未醬未考是今世稱スル処ノ國ニカノ玉未醬ヲ云ルカ猶未醬ノ
名目アルモノ下ニ載ル如シ亦常ニ用ル為ニハ邪^カ造^リ嗜^ムノ
○菊未醬他州ニ於テ麴ヲ加ヘテ造ル也 未醬也 ○酢未醬未糠
ヲ炒リテ酢ヲ以テ練リ鹽ヲ加ヘテ食フヲ云

○糲汰

本玉ノ民秋ノ新大豆ヲ採リ湯デハ石臼ニテ挽キ鹽ヲ和テ食フヲゲニ
ト云フ也未解 ○或曰或書ニ糲汰未醬ト稱スルアリ正字通康熙
字典等ニ搥^ルニ糲^ハ糲^ニ作ル屑米又糲ト謂フ秋ハ其籐諸韻書字
籍ニ不載偶闕糲糲字於篇海類編再 又曰糲謂米粒 和^ミ糲
糲糲稟和也糲滓也疑フラクハ古人糲ヲ誤リテ秋ニ作り糲糲ト
稱スベキヲゲニダト讀易タルモノニマ又古ゲシダミワテ作り常用ニモ

備へ其陶^{テラ}ラゲレダ瓶ト云フ歟 ○汝石集卷第四^{道人可堪} 房曰秦^シ太瓶一ナリ^{執心トマラシ}物ハスツベシトコソ^{下略} 俊乘

諸品

○著御類并名品

本土ノ民間ニ於テ用ルル品類也國名等ヲ載 ○蓑 他州ト同
國名ヒヨリミノ凡云 ○バンドリ 他州ニテ鷹匠蓑ト云フニ同シ
神アリ國名背巾蓑トモ云 ○耳垂笠 檜楳ノ木ヲ批^{ヒキ}テ細代エ
編タル^也國名檜^{ヒキ}トモ云 ○ウツタリ帽子 他州ノ俗カス頭
巾ト云ニ同シ ○篋 木ヲ批テ編タル篋也下民山野田島ニ出ル
巾腰ニ附ル ○テレゴ 藁ニテ造リタル篋也 ○荷繩 篋テシコニ
副ル繩ヲ云 ○セナコチ 物ヲ負トキ背ニ當ルモノナリ藁ヲ以テ造ル
○子コダ 藁ニテ組タルカマスノ如キモノ也下民耕耘^{クサ}トキ常ニ背ニ

覆イテ夏日炎暑冬日寒風ヲ防ク為也 ○雪袴 太布^{タフ}ヲ用ユ俗ノ
立附^{タテツ}ト云フニ似テ膝下ヲ限リトシ下ハ脚絆^{キヤハシ}ヲ用ヒ耕作山カセキトモニ
著ヒリ猿袴トモ云ヘリ ○蒲脛巾^{カマハキ} 蒲ヲ以テ編タル脚絆也 ○シ
ナハバキ 檜木皮ヲ以テ編タル脚絆也 ○輪^ワカシキ 下民積雪
ノ上ラ歩行スル具也熊抑ト云フ木ヲ以テ直一尺余ノ輪ト成シソ
ノ輪ニ瓜ヲニツ造リ又輪ノ中英ニ板ヲワタシ是ニ巾履ノ如キ緒
ヲ作り脚下ニハキテ往來スル也 西行家集アラケ山ガカシクハタル
谷モアツカカシキノ道ヲツクル白雪 ○鐵^テカンジキ 鐵ヲ以テ造ルニツノ
爪^{ツメ}ナルモノ脚絆^{ワラハシ}ノ裏ニ付テ用レ也 ○ハナモジ 深雪ヲ歩行スルニ
脚ノ爪甚タ痛メリ仍テ藁ヲ用イ爪ノ先ヲ包ムモノ也爪カケルニ
リ茅ヲ以テ作ルヲウソツペト云フ也 ○ズンベシゾウ 藁ニテ編タル
雪沓也鞠沓ノ如クニシテ筒長ク膝ノ下ニ及ヘリ ○釘木履 冬

日道路悉ク氷ト成レリ故ニ氷履ノ裏ニ釘ヲ打テ用ルヲ云フ ○氷
雪踏 木皮ヲ以テ造ル雪踏也 櫻ノ皮或ハ胡桃皮ヲ用ユ及ニ片
ヲ合ヒ櫻木皮ニテ脚鼻結ハ芋ヲ用イ横緒ハ藤ヲ用ユ ○足中足
中押履也他州ニ同シ ○ツラヌキ 野猪ノ膝ノ芋ヲ以テ造ル沓ナリ
獵師ノ用具也

○器用類并各品

本土ノ民間ニ於テ用ル處ノ品類國各等ヲ載ス ○畜水槽 木ヲ
鑿成ハ曲物ヲ用イ大巾ノ水桶トセリ夕ガニ用ル竹甚々之ニキ故也
○馬槽 上同シ馬ノ飼桶裾多クイ也 ○自在鉤 民間園庭裏ニ
下テ鉤釜ヲカケル鉤也其上ノ鉤ハ複ノ曲リヲ用イ中ノ竿ハ棒ヲ用イ
下ノ鉤ハ柔ノ曲リヲ以テ作ル古法トスト云ヘリ亦由未詳 ○三本
脚 山野ニ於テ食ヲ調ントスルキハ竹木ニ限ラス三本ヲ集メテホナル

方ヲ結ヒ下ナル方ヲ開カセ建テ上ヨリ繩ヲ下シ自在鉤ノ代リト成シ
テ鍋釜ヲ懸ル也陣圍ノ畧ナルヘシ ○ユスクイ 木ヲ以テ作ル物也
○ソリ 深雪ノ氷トナリメルキ人ヲ乗セ或ハ薪ヲ積テ引モノ也
西行法師家集タユミツソリノ早緒モツケナク之積リニケリナ瑟ノ白雪

○農具類并各品

本土ノ下民用ル處ノ農具也其國各等ヲ載ス ○鋏 他州ト同シ
○引鋏 他州ニモアリ形鋏ノ如シ柄ハ前後ニ二本アリ兩人ニテ引ル也
○耙 他州ト同シ苗代ノ片馬ノ後ニ附テ耕ス也 ○大豆葉 他
州ノ小鋏ト云フニ似タリ種子ニ出ラカケ或ハ草ヲテスリ取ル凡テ細
密ナル業ニ用ユ ○薙刀 他州ト同シ ○伐柴鎌 他州ト同シ鋏
ヲ原ク作ル ○刈草鎌 他州ト同シ鐵ヲ薄クス ○サスカ 他州
ニ於テ山刀或ハ海府トイフニ同シ ○田鞍 田代馬ノ鞍也飯ニ肌附

ヲ造り上ニ荷鞍ノ片輪ヲ置也腹帶尻掛胸掛ノ便トスルノ也他州
 同也 ○鼻竿 苗代馬ノ鼻草ニ附ル竹也率細ノ代リトス他州
 同也 ○大脚板 板ニ横緒ト鼻緒トヲ作り是ヲハキテ田ノ乾ラ泥中
 ニ踏ユケモノ也 ○コイバシ 他州ト同シ稻ノ穂ヲコキ取ル竹ノ小管也
 イ子コイバシト云フ ○カラハシ 麦ノ穂ヲ取ル竹ノ管也 ○ケントシ
 麻絡ヲ以テ編タル節也他州米トラシト云フ同也 ○淘汰輪 他
 州ニテエリ板或ハエリ蓋ト云フニ同也板ト精米トヲ撰シタル器也エリハ
 撰ハ義カ輪ノ巨リ一尺五六寸縁高サ三四寸アリ是ニ米ニ非バカリ
 入レテ陶也米ハ縁ニヨリ板ハ中英ニ集ル ○箕 他州ト同日本五三
 テハ胡桃ノ木皮ヲ以テ造ル ○柝把 他州ト同也近世造リ出セル器
 也今世ハコイバシノ代リトスセバ或ハマモメダラシト云フ也 ○賜扇
 他州ト同也近世造リ出ス淘汰輪ノ代リトス ○扇米風車 他州ト

同也近世造リ出スケンドシノ代リトス ○尾節 他州ト同也毛竹節ト云フ
 ○籬磨 他州ト同竹ヲ以テ丸組立テテ塗リタルモノ也取ラ挽ナリ
 ○木礪 他州ト同木ヲ以テ造レル挽白也 ○碓 他州ト同シ稻臼也
 ○石臼 他州ト同 ○搗臼 他州ノ多白春臼ト同也 ○搗杵 他州
 ノ米春杵ト同也 ○手杵 他州ト同 ○打棒 五穀ヲ初メ物ノ實ヲ打
 落ス棒也連軸或ハ輪棒ト云ニ同也 ○ハサ 五穀ヲ初メ物ヲ干乾カス架
 也他州ニテ喬杵杵架ト云ニ同也

○國匠用具并各品

本土ノ工匠所用ノ具之ヲ載ス ○鋸 大鋸 挽切 小鋸 松鋸 ○鉋
 清鉋 白削中シコ荒シコ内丸外丸 臺ナラシ 廣ノミ 小廣 厚ノミ ○釘
 キテウシ鉋 ソキ鉋 取トリ 底トリ 底鉋 ヒブクラ 薄ノミ 壹丸 撻丸 ○釘
 斤又手鉋 ○規 規子 天王寺カ子 天反 裏カ子 ○槌 刀ケツチ 方推 ○鐵槌 小
 兩切又 ○鑿 鑿子 ヒトコマカ子 丸大カ子 ○槌 竹筆 丸石ボク ○錘
 ○鎗鉋 大竿 大反 裏白 ○墨斗 糸糸口車 壺綿 カイデ ○槌 白筆 大ノチ ○錘

大トラニ 中トラニホトラン ○鏡モダリナギ ○釘貫クキヌキ 十斤 ○毛引ケヒキ カタチケヒキ

○私人用具并各品

本工ノ山林ニ於テ私人ノ用ル品類ヲ載ス ○伐斧キリヨキ 又長尺ハセハ 三寸柄ツバ 規カ 刻ミ用ル也凡テ大木トモニ根伐ニ用ル谷也 ○サノ斧 又廣トモ三寸七寸又八寸又ト云フモアリ根伐ノ後角物平物トモ其形ヲ作ル谷也作ルヲサマスト云或ハツルト云フ私人ノ通言也 ○又カケ斧サヤノ鞘也 ○おエウチ大木トモニ其枝ヲ伐ル処ノサヤサヤノ名ナリ ○墨斗スミツボ 工匠ノ所用ト同 ○規矩カゴ 木或ハ竹ヲ以テ造ル ○子コダコダ 檜木皮ヲ以テ綿ワタカラス也用具ヲ皆是ニ藏メリ

○機子并各品

本工ニ於テ用ル処ヲ載ス機子ハ總名也用具多品ニシテ用ル処委シク識シガタシ仍テ各目ヲ擧ルル

○高機 ○平機

○山ヤマ ○車クルマ ○イヌ ○機マキ 子コ 履ツキ ○藤フジ ○籬シ 附ツケ ○ハタケサ ○アサリ竹 ○篋カネ ○篋カネ 推オシ ○キツ子 ○櫻サクラ ○押オシ 竿サハ

○カサリヨカサリヨ ○箒ハシ ○シシ、ハシ 箒 ○篋カネ ○篋カネ 推オシ ○キツ子 ○櫻サクラ ○機マキ 返マゼ 棒バウ

○機マキ 帶オビ ○鋪キ 版イタ 以上絹細涼袴木綿麻太布ノ類ヲ織時セ

リ左男女尺ニ是ヲ勤ツツメリ

○機絲用具并各品

本工ニ於テ糸ニ用ル処ノ具是其各目ヲ擧ルル

○篋カネ ○篋カネ マシ ○舞マユ 尻シ 蟬セミ 車 ○纏マキ 羽ハ ○駮カ ○駮カ 纏マキ ○走ハシ ○駮カ ○駮カ 纏マキ ○駮カ ○駮カ 纏マキ

○纏マキ 車 ○纏マキ 小コ ○績ツク 纏マキ ○走ハシ ○綈ハシ 臺ダイ ○車 ○鋸ツツ ○手テ 篋 ○絡クワ 梃 ○絲イト 通

○延ノビ 臺 ○手テ 代 ○ササ ララ メメ キ

是近曲作り出セシモノニテ
走ト篋ト両用ヲ兼メリ

以上竝ニ燃機ニ組處悉ク是ヲ用エ

諸説

○地名訛轉

本エノ民ノ言語ハ凡テ約ニ唱フルニ跡キ也土地ノ質氣ヲ云ヒテ其渥
畧ヲ載ス此類ハ是ニ限ルニハ非ス餘可唯知之猶地各々外ハ稱謂
言語ノ條下ニ載タリ ○セウガ野 正觀音野也益田郡ニアリ

○ビジョウゲ 美女峠也大野郡ニアリ ○ホノボ 保農府也同郡ニ

アリ ○ラツハラ 大原也同郡ニアリ ○アツボ 朝暮也吉城郡

ニアリ ○カシヤホラ 柏原也同郡ニアリ ○カシマテ 柏當也同郡

ニアリ ○アツテ 朝浦也同郡ニアリ

○大師饅餅附 大師踏考

本エノ諸ノ意地ナル人ヲ呵ル言アリ 磨坂ノ大師饅餅宿ニ食

ト 梅スルニ是吉城郡岸奥村ノ山澗ニ磨坂ト云フ杖村アリ古此

地ニ於テ十月廿三日各家毎ニ饅餅ヲユシラヘテ祝シ食フ是ヲ大師饅

餅ト稱セリ然ルニ一家ノ民曾テ信セスレテ翌日食フヘシト云テ時々

リシガ其夜ハ口ラスモ山上ノ積雪山崩レ落テ彼民一家一戸ノ埋没セラ

レテ男女ヒトリモ残ラスト死セリ其中ニ幼兒アリ 園ト云フモノニ

入レ置タリシニ大師饅餅ノ器物ト共ニ遙ニ遠キ川ノ端ニ自然ト押

出シテ彼中鬼ノ命ハ助リ又是ヨリシテ斯ノ云ヘル夏ニテ有ケルトウ此

俗説ノ如キハ古昔此州ニ於テハ小豆粥ヲ煮ルヲハ致サスレテ饅餅

ヲ用ルト見ユタリ今世ノ民ハ悉ク十月廿三日小豆粥ヲ煮テ大師

粥ト稱スルト他州ニ同シ又今俗ハ弘法大師ヲ祭ルトト思ヘリ蓋

トリチカヘテ云ナルハ是ニ慈慧大師也又諸州ニ於テ粥ヲ煮テ

祭ルト其月日一般ナラサル或ハ十月三日五日 廿三日 或ハ

戊巳日等ヲ用ル地モアリト云其故ヲ不知又蠅子ハ大師粥ヲ
食ハザレハ不整サラス云是也磨坂ニモ往古ハ元三大師堂アリシモ後
世廢セシモノ歟今ハナシ猶大師ノ大畧下ニ載ス○美濃州各務
郡鵜沼御元三大師堂化緣募疏云滿通萬里撰之叡山慈慧大師之母
始夢坐大海中日光入懷延喜十二年九月三日誕生江州淺井
郡倉日天子應化也十二歲登叡岳遂究顯密玄奧應和三年
轉爲上家大法輪於清涼殿右二天童隨侍左右永觀三年乙
酉正月三日示寂故稱元三大師自永觀乙酉到文明已亥凡四
百九十有一年也杖桑六十餘州在々一所々宮堂宇安尊軀歲時
薦祭供五穀豐祭群黎康樂而無些子災厄偉哉尊哉滅後已向
五百霜其餘光赫々始々猶實相日輪照輪于時仰之彌高云云

○木呂羊楯

本土ニ於テ常用ノ薪ヲ木呂ト云イ楯ト云ヘリ總名ハサ新或真木ト稱
ス山中ニテ何ト云フニハ限ラス雜木ヲ以テ伐出シ谷川ニイレテ流シ
来ル商賣ノ肆ニ至テ是ヲ取揚集メテ人家ニ運送スル也 按スル
ニ杣人ノ凡テ材木ノ下ニ鋪テ枕ト成セル木ヲサシテ 其大キナルヲ号
シテ修羅木ト云イ由來ヲハ木呂ト云フ或ハコロハシ云ヘリ蓋木呂
ハコロフノ義ナルヘシ楯ハ木ノ株也 ○萬葉和歌集曰 斐太人
之真木流云爾布乃河事者雖通船曾不通以上示布川考ハ土地部各評ノ條下ニ載リ
親ノ親子ノ子ノ子マチ山賤ノ由多史々テカタヒトソスル ○大谷
寄曰顯國大原ヤ楯タツ賤カ麻衣ウラマシクモ澗又袖カナ
○保木

本土ニ於テ保木ト稱スルモノハ他州ニテ麓原ト云フモノ也凡テ木ヲ枝
ナカラ伐リ用ルヲ云ヘリ 按スルニ保木ニ作ルハ誤リナルシ木ノ穂ト

云フノ義ナルカ保木ヲ用ルル処ノ各目ヲ載ス

他州ニ云土橋ト云フニ同シ

○保木道 山ノ半復或ハ泥沼ノ地ニ是ヲ鋪テ上ヲ覆ヒ作ル

○保木垣 他州ノ麓及垣ト云ニ同

○保木山 山林也

○二ウ 芋 品

本エニ於テニウト稱スルモハ他州ニテ稻室或ハ稻ラト云ニ同シ其五下

ニ載ス ○稻ニウ 稻ヲ積ニウ也 ○藁ニウ 藁ヲ積ニウ也 ○大ニウ小ニウ 共ニ其大

○二ウ蓋 ニウニ積ル頂ヲ覆ヘル蓋也是稻藁ニ其一把ヲ取テ赤ノカラ括リテニウノ頂ニ置クモノ方ヲ下ヘ垂レ置カヘテス也總テ田畠菜園等ニ時ニ置クモノニハ必是ニウ蓋

作リテ覆ヘリ霜雪ノ他ニ異ナル故ナルヘシ 其ニウヲ作ルハ他州ノ稻ラヲ作ルニ同シ稻ノ穂ノ

出ニ附ザルヤウニ地際ハ穂ヲ上ニナシ圓ク立ナラズベテ半ヨリ上ハ穂ヲ地

ニ下シテ段々ニ上ノ方ヘ細ク積重子テ後其トヨリハニウ蓋ヲ以テ覆

フコ也 ○隱岐ノスサミニ云フ 隱岐ノ國ノ人他州ニ遊ヒテ廬租考ノ墓所ニ帰登スルコトアリ其紀行ナリ

後鳥羽帝ノ御製トシテ賤ノ女カカタツキ交ラ靴シワビテニウニヤス

ラン五月雨ノ比ニウトハソモ何ノコトゾト問ハ此境ノ人モ知ラス畫者

ニニウニ雀ト望キハ稻室ニ雀ヲ画ク交ヲモ室ニナシテ靴ヲ置ク侍レ

ハ麥ノニウニ云フ人キヤイブカシ以上 採スルニ今世本エニ於テ麥ノ穂ヲコ

キ落シ水ノゲト云フモノヲ取ルトテ春ヲカカタツキト云イ春テノゲヲ除キ

タルヲカタツキ交ト云ヘリ再カタツキニイタスハ麥ハシメリ多キモノナレバ

帳ク日ニ乾シテ後ニ春也夫ヨリ春ハマヅキト云ヘリカタツキノ後ハ幾度

春モ皆マヅキノ中也サレハ此州ニ例セハ其カタツキニナサレニモ晴間ナ

キ五月雨ニ乾クテ其穂ヲモコキ取ラズシテニウニ成シ置ラフヤ隱

州ニテモ昔ハ稻室ヲニウト云イシモ後世各ノ習リケル故此州モ今世

麥ニウト云フニハアラ子厄古ハアリタルナラニ既ニ藁ニウハ今世モアリケル

ヲ思ヘハ物ヲ貯ルニ及ンデハ何レヲモニウニシ侍リ又ヘシ古ハ去年ノ稻ヲ

甚マテモ貯ヘタル事古畫ニ見ヘタリ是コイバント云フ竹ノ管ヲ掌中

ニ持テ一穂毎ニ振落セシニヨリ人数多カラサレハ速ニ扱ニナシカクシ
然ルヲ近世イナコキト云フモノヲ造リ出テ一扱ヲ一扱ニスルニ其勞
ナシ俗ニイナコキノ別各ラヤモメタヲシト云モ此謂也 ○栲草子春
曙抄卷第^五 クナラシキモノ、條下五月清少納言 日稻ト云フモノヲ多クトリ出テ
下畧 註云ク清少納言ナトハ馳走ニ去年ノ稻ヲ取出テコカセテ見スル也
源氏ノ源磨ノ卷ニ三月バカリニ馬ニ稻ヲ飼シテアリ古ハ秋ノ稻ヲ其
マ置シト見ユ以上 ○或曰貪家ニ三春ノ間麥ノ貯既ニ盡テ新麥ノ
熟セルヲモ待カ子青麥ヲ刈リテ青ザレト云モノニツクリ食フ其折コレモ
過漸其ウツルニアイテ刈取リタシ凡五月兩ニ乾キカ子カタツキ麥ニナ
サント思ヒシモ成ラズシテ糶ト云フモノニ作り出ス本意ナキト也糶ト
ハ何ニテモ五味モ七味モアルトアラユルモノヲ粉ニ挽テ其中へカタツキ麥ヲ
モ入レ水ニテ子ヲ飯炊ク上ニ置テ蒸アゲテ飯ニ和シ食フヲ糶飯又ハカテ

メシト云フカテハ糶也糧根トハ別ニシテ物ヲ和ハルテカテルト云ハヤリ
糶ハ字書ニ糶ナリト註セリト云云以上ノ説ノ如キハ稻室ノニウニウ
アラスカテメシノニウ也御製ノニウハ是モ近カラシ糶故ニ各説ヲ載ス

○重食

本エニ於テ古昔ヨリ弄フ必ノ雙六ヲ重食ト云フ常ノ雙六又大和双
六ト云フモ非ス是古代ノ雙六ナルト稱又其盤ノ法石ノ數常用ノ
製ニ同シ石ノ置ヤウハ大和雙六ノ法ト常用雙六ト交ヘリ其石ヲツ
カウ法ハ以上ノ二品ト甚タ異レリ 猶下ニ載ル如シ ○我カ五石ヲ
内ノ五地ニ置ク 是常ノ雙六ト同シ ○我カ五石ヲ向ノ外一地ニ置ク 是常ノ雙六ト同シ
○我五石ヲ向ノ内一地ニ置 是常ノ雙六ト同シ ○我カ五石ヲ向ノ外一地ニ置ク 是常ノ雙六ト同シ
上ハ石ノ置ヤウ也自是以下石ノツカイヤウ實目ノ用法ヲ載ス ○賽
ハ一目ヲ以テニ石宛ラツカイテ一度ニ四石ヲ動スヲ法トス 重目ノ出タル
所カ子テサ

イフワリ并ニ箇ヲ教サヌト 又五四三六ノ兩目ハ重目ニ須セリ常ノ雙六ニ
重一重六ヲ重シタルカ如シハ五四三六ヲ稱スルハ向ノ内一地ニアル五石ヲ
外地ニ出スヨロシク又一石ヲ動サントスルキヤトハ實ノ目五四三目九
ツナリ是ヲ引ニ二十九トシテ二石ヲ以テ我カ内五地ヲ引附ル也餘モ又
可准知之一度ニ四石ヲツカフ法ナリト云フ凡此其時ニ應シテハ一石或
ハ三石三石ヲ用ルモ自由セリ其地ヲ造ルト云モ五四三六等ノ定石ノ道ヲ
カシク事一ソノ端石ヲ依リ又其石ヲ置テト成ル事ナリト成ル
事悉ク常ノ雙六ニ同シ大凡其法ノ渥畧如此 ○楮杣子春曙抄
卷第ニコノ條云川舟ノクサマハゴロメノヨクツキヲルテウバミテウ
ヲホクウチナル註云テウハ調里ト同シ重食雙六ノ遊ヒナリ ○後然
草文段鈔雙六之條下註云昔言故事云鳥曹氏作博陸博陸米
名也即是雙六ナリ聲譜云陳思王製雙陸局置穀子ニテ頃賞

全篇ニ中萃並ニ四夷ノ雙陸ヲ載タリ其中日本國ノ雙六ヲモ葉
テ箇説ヲ記セリ以上猶和漢三才圖會等ニ未タ
○生食牙產附磨墨之字解

杖桑見海私記 曰東國勢發行ニ時佐木橋原馬ニテ爾タリ其比武備秘藏ノ馬ニ定アリ生食牙產也磨墨墨若白毛也
生食牙產波國ニ産シテ其後海上數里ヲヲヨギ雲州松江漢東東ルヲ海ニ取之迎回ノヒリニアタフヒリ鎌倉ニヒキタリテ
武備ニタニマツルモノ也毛色ハ黑栗毛ニテ八寸計大ノ尾ニキリテ尾ノ前ノ白ク麻留ヲ人主使ニ當タルニウシモ幼ルヘクモヤシク
若白毛ハ奥州ニ産シテ立身巴秀衛方ヨリ九郎宗者ニ進セラルヲ武備ニタテマツル也毛色友能ニ定タリト云ニ磨墨墨若白毛同外ニテ
三ノ戸立ノ産也見ハ秀衛丸尾氏能カテマツル也七サ計ノ大ク是ニウシキワメテ色黒カリケレハ磨墨墨若白毛ト云
源大比時生食牙產ヲ記ストモ下サラス磨墨墨若白毛ト云ニテ是ニ至長自記ト所波成良傳ナリ諸書ニ至ルサレハ書也是ニ見ル所ノ飛州ノ
右ノ見聞私記ハ其内ノ人大江廣元ノ作ニテ是ニ至長自記ト所波成良傳ナリ諸書ニ至ルサレハ書也是ニ見ル所ノ飛州ノ
産ハ見エ下ノ説ト相違アル也

ノ始メニ鎌倉ノ再興ノ時ニ過タリトテ梶原平治丸衛門カ奇マテ率レテ
又磨墨墨若白毛一條殿ヨリマイラセラレタル甲斐ノ黒駒也太マウ牧ト云フ
ヨリ出タリ 下畧 平家物語ニ佐々木四郎ノノタマアラレタリケル御馬ハ黒
鹿毛ナル馬ノフトウタクマシキガ馬ヲモ人ヲモアタリヲ拂フテクセケレハ
イケズキトハ附ラレタリ梶原ガタマワツタル御馬モヤワメテフトウタク

イヲアリ并ニ箇ヲ放サヌト 又五四三六ノ兩目ハ重目ニ須セリ常ノ雙六ニ
云フテ事ノ雙六ニ同シ 又五四三六ノ兩目ハ重目ニ須セリ常ノ雙六ニ
テツチナリトテ 重一重六ヲ重シタルカ如シハ五四三六ヲ稱スルハ向ノ内一地ニアル五石ヲ
外地ニ出スニヨロシク又一石ヲ動サントスルキタトハ實ノ目五四三六目九
ツナリ是ヲ引ニ二十九十八トシテ二石ヲ以テ我カ内五地ヲ引附ル也餘モ又
可唯知之一度ニ四石ヲツカフ法ナリト云フ凡此其時ニ應シテハ二石或
ハ二石三石ヲ用ルモ自由セリ其地ヲ造ルト云モ五四三六等ノ定石ノ道ヲ
サレテ事一ソノ端石ヲ伐リ又其石ヲ置クトシテ成ルヌアリハト成ル
事悉ク常ノ雙六ニ同シ大凡其法ノ渥界如此 ○楮杣子春曙抄
卷第ニモコトク云川舟ノクダリサマハゴロメノヨクツキナルテウバミテウ
ヲホクウチサル 註云テウハ調里ト同シ重食雙六ノ遊ヒナリ ○後然
草文段鈔雙六之條下註云昔言故事云鳥曹氏作博陸博陸米
名也即是雙六ナリ聲譜云陳思王製雙陸局置殿子ニテ頃賞

全篇ニ中萃並ニ四夷ノ雙陸ヲ載タリ其中日本國ノ雙六ヲモ崇
テ箇説ヲ記セリ以上 猶和漢ニ戈圖會等ニ委シ

○生食野産附磨墨王ノ字解

本土ニ於テ口碑ニ傳フル処昔鎌倉ノ時生食ト云駿馬アリ當州吉城
郡池俣村ニ産ル後鎌倉右大将家ニ奉リ初メハ其名ヲ池月ト稱スル
ト云ヘリ 事實事詳也 其比鎌倉殿ニ生食磨墨トテ秘藏ノ駿馬ア
リ生食ハ奥州推尊立ニテ海東小太郎業衡ノ後家徳尼子ヨリ治兼
ノ始メニ鎌倉ノ用興ノ時ニ遇タリトテ梶原平治九衛門カ奇マテ率レケル
又磨墨ハ一條殿ヨリマイラセラレタル甲斐ノ黒駒也太子ヲ牧トスラ
ヨリ出タリ 下畧 平家物語ニ佐々木四郎ノノタマアラレタリケル御馬ハ黒
鹿毛ナル馬ノフトウタクマシキガ馬ヲモ人ヲモアタリヲ拂フテクヒケルハ
イケズヤトハ附ラレタリ梶原ガタマワツタル御馬モヤワメテフトウタク

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured by a sticker.

マシキガ誠ニ黒カリケレハスルミトハ附テタリ以上 ○或曰波石集
卷第四 道人可捨 執著條下 曰法問ノ次テニ樂天之詩ヲ引出シテ云匹如身後有
何事 アタスヨナカシ 應向世間無所求 又ノ意ハ人ノ一物モ手ニモタヌヲ匹如身ト云
下界以上ノ文意ニタトヘテ此馬ノ至テ疾ク人ノ手ニ物モ持アヘヌト云
トテスルミト稱セシモノニヤ

○若木迎

本土ノ村民毎歳四月二日其村里ノ山林ニ入始テ薪ヲ伐ル是ヲ祀テ
若木迎ト云フ也其木ヲ集テ積置テ若木棚ト云ヘリ

○菅粥

本土ニ於テ作毛ノ豊凶ヲ試トテ粥ヲ煮ル也他ノ穀不熟トシテ
ハアラヌ其一村毎ノ事セリ古昔九州内一般ニ行ヒガ後世悉ク廢シ
テ今ハ大野郡中八賀郡ノ村里ニ残ルト云ヘリ毎歳ノ四月十四日是ヲ

勤ル民家ニ於テ精進潔濟ヲ專トシ女人不淨ヲ禁ス圍炉裏ノ火ヲ
改メ黄昏ニ及テ一村ノ民彼家ニ會合シテ五種ノ品ヲ和テ粥ヲ煮ル
又竹ノ管ヲ入ル仍チ菅粥ト稱セリ其五種ハ糯米 精米 押ヤ豆 餅各五
合宛 但し刻 串 併五合 同上 竹管一寸二分 圍長三寸ヲ古法トス即無シ
其管毎ニ印ヲ付ケテ第一米第二大麥第三小麥第四大豆第五小
豆第六押ヤ豆第七粟第八蕎麥第九角豆第十蚕飼トス是ヲ藁ニ
ニテ編テ一連トナシ釜ニ入レサテ粥ノ能ク煮タル片一連ノ竹管ヲ取
リ出シ其管ヲ割ツテ中ニ籠ルモノ、多キヲ滿作ト稱シ少キヲ不熟ノ
證トセリ管中各見終リテ後其粥ハ群衆ノ民視イ食フ事ナリト
ノ末申事詳 ○倭漢三才箇會卷第七十五曰 河内國平岡
大明神祭神四座天咫屋根命 菅不合尊 大國主神 天照大神 若
宮一座 天押雲命 天兒屋根 命之子也 振社青柳社 岩本社 一言社 大山彦社

戸隠社正月十五日ト田祭煮^ル豆粥^ヲ別用^ニ五寸竹筥^ヲ盛^リ米及雜穀^ヲ種^ヲ投^テ之各見^ル熟不熟考^ス同十六日踏歌祭二月朔日平國祭^ニ及暮^ニ入^リ山林^ノ深木^ノ叩^キ并^ニ殿樓閣^ノ趨^リ歸^ル
以上素スルニ是等ノ貴凡ナシカ猶信州
諏訪縣州三摠ノ神社ニモ箇粥ノ事アリ

○天狗怪説

本五ノ誘^ニ深山ニハ山ノ麓ルト云フ^ノ或ハ怪キモノ未^テ窺^フ事ナシト間^ハアリ是等皆天狗ノ俗^ヲ欺^キ見^ルノ類也故ニ怪キニ遭^ト云ヘ^ル田留^テ其^ノ夏ニカハハラス色^ニガツトムベキ業^ヲ勤^メテ恐^レス争^ハガレバ怪異終^ニ失^ス又昔水^ヲ片^キテ桶^ノダガト云フモノヲ業^トスル杓人^ノ宮山^ニ行^テ木^ヲ片^テ居^{タル}ニ^ハ峽州竹^ノ皮^キニヨリテ木^ヲ片^テニ^ハ櫛^ノ皮^ニテ^ハ開^テテ^ハ各^キノ^ハ代^リトス^ニ其^ノ射^思ロシキ山^ノ丹^来テ久^{シク}守^リ居^レリ杓^ノ心^ニ是^ニ天狗^{ナル}ヘ^ル如何^レテ退^ジケンヤト思^ハハ^ル海^ノイカ^ニマ^テ我^ヲ天狗^ナリト察^シテ事^ヲ巧^ムト杓^ノ心^ニ思^フフ^ヲ知^リテ悉^クト^ガイ^シガ^ハカ^ラズモ^ハ縮^{タル}籜^ノハ子^テ山^ノ臥^ノ鼻^ニア^タリ^ケレ^バ甚^ク驚^キ

テ己^ガ如^キ心中^ノ知^シ又^ハ恐^{ロシ}キモノ^ヲ未^テ見^ルト云^テ立^去リ^ケルトナ^リ
○駿^臺雜^話曰^ク空^齋新^助直^清述^作字^士礼^加賀^ニ在^シキ人^ノ語^リシ^ハ北^國ニ^ハ賊^キモ^ク獲^驪山^ニ行^テ杓^ヲ採^テ扱^ニヘ^キ生^業トスルモノ^{アリ}或^ハ時^山中^ニ杓^ヲヘ^キテ居^ケルニ獨^リノ山^ノ臥^ノ鼻^ノ隆^キカ^未シ^テ見^テ心^ニ不^思儀^ノモノ^ナカ^テ天^狗ニ^ヤト^思フ^ニ汝^ハ何^トテ我^ヲ天^狗ト^思フ^ゾト云^フ早^クサ^レカ^{ント}思^フニ汝^ハナ^ド我^ヲイ^トヒ^テサ^レカ^{ント}思^フゾ^ト云^フ何^ニテモ心^ニ思^ハ早^知リ^テトカ^レ程^ニ後^ハ是^レ非^ナク^甚キ^{タル}杓^ノ長^クハ^ズタル縮^テ繩^モテ括^トセ^レニ心^ナラズ^取ハ^ツシ^テ扱^ノハ子^ケルホト^ニ其^ノ扱^ノ亦^ハ天^狗ノ鼻^ニシ^タカ^ニア^タリ^シカ^ハ汝^ハ子^ノ知^レ又^ハモノ^カテ^ハ恐^{ロシ}ト^テ行^サリ又^ハルト^ソ扱^ノハ子^ケルハ見^慮ヨ^リ出^サル^トナ^レハコ^ノハ天^狗モ^及バ^ズニ^コソ^是ニ^テ知^ルヘ^シ念^慮ナ^キ處^ハ鬼^神モ^ウカ^ヒ得^サル^ニナ^シアリ^ケル

○沼突沼坪之説

本云於テ凡テ山上ノ積雪ノ額落ルヲ國名沼突ト云フ山間深雪ノ地ニハ必此変アリ其毎歲突テ崩ル、亦ラサレテ沼坪ト云ヘリ是處寒ニ至シテ積雪未トナラナル時ト云春後暖氣ヲ催ス時也仍テ其額ニ落ルニ至テハ山頂ヨリ未ハ勢ノアル限リ幅數十間或ハ數百間モ押行テ谷ヲ埋メ川ヲ塞キ又サレハ此時ニ行カレシ人ハ免カルニ術ナク埋没セラル、ヨリ要路トイヘ凡必其時候ヲ考ヘテ人ノ通行ヲ止メ畢又故ニ常モ山上ヨリ砂石ナシトノ落ト下リテハ速ニ通り去ル丁トセノ是等其初メワカナル由石一ツナレ凡響語ハシテ他ノ砂石多ク落ト下ルコトアリ或ハ初メノ一石途中ノ山頂ニテ度毎ニ自然ト刀強大ニ成ツテ山下ニ至リ往來ノ人ニ中ツテ疵ヲカウムリシモノヲ見ダリシ也

○笹荊萱裨殺萩葉河岳等變化之說

本云於テ物ノ化生スル品類下民ノ口碑ニ傳フル処其説多クト云ヘトモ未由分明ナラズ仍テ大畧ヲ載ス詳ナルニハ及バズ ○山笹ノ芽イウナト云々奥ニ成ル 山中於テ籠ノアクリニ生セシ山笹ノ芽常ニ水氣ヲ含ミ毛ノ自然ト長三四寸バカリニ至テ竹ニ附名処ハ奥ノ頭ノ妙中程ハ大光ク背ノ如ク腹ノ如シ其赤ハ細クテ自ラ尾ニ似タリ全株竹ノ皮コマカニ重リ覆ヒ臭鱗ノ如シ 梅タルニ是ヲ割テ見ルニ中直マテモ竹ノ皮ヲ束子タルガ如キモノニテ骨肉モナシ火中ニ入レテモ臭ノ臭氣モナシ其故未考知リガ名疑フラクハ是竹ノ病トモ謂ヘキモノニヤ イウナ正字 溪澗ノ流ニ生スルモノニテ其形ハ鱗ノ子ニ似テ背ニ黒色斑ノ星アリ味を宜ク食ノ如シ長七八寸ニ至ル尺ニ及フモノハ稀也其勢甚猛クシテ常ニ水上ヲ飛行スル蠅其餘ノ由出テ飛上ツテ取り食フモノナリ ○荊ノ芽蠅蟻ニ成ル 白キ花ノ荊ノ芽久シク水ニ浸リテアレハ其枝未

悉ク蠅ト化ス也既ニ變セシモノ亦尾ノ枝ヲ離レサルヲ見タリ 按スルニ
 白花^{シロキハナ}荊ト云ヘテスヘテ斯ク化スルニハ非ス 適^{タカ}其莖ノ色赤キモノアリ且
 必變生スト云リ ○萱ノ根ヨリ蛇生ヌ未由未詳 ○古^{フキニノコ}得^{トク}殺^{コロス}ヨリ小
 鼠生ヌ是世日鼠ト云ヘル類也近世得^{トク}殺^{コロス}チ久シク 鼠^{ネズミ}ニ積置ケル民ノ
 或持是ヲ崩シタルニ小鼠數十足出ツ其中ニ尾ハイマダ得^{トク}殺^{コロス}ニテアリ
 シヲ見タリ ○秋葉黃蝶ト化ス白花荊ノ葉適枯レテ白ク黄色ナル
 モノアリ此葉其色ノ蝶ト成レリ既ニ全身化レテ頭ハイマダ枝ヲ離
 レサルモノ兩羽ヲ動カスヲ見タル也毛虫モ春生シ第ニ蟄シ秋ニ至ツテ
 蝶ト化セリ指蝶ニ化スルノ類甚タ多シト見エタリ 倭漢三才圖會
 卷五十二曰本網蝶蛾類也大曰蝶小曰蛾其種甚繁皆四翅有
 粉好嗅花香以鬚代鼻其交以鼻交則粉退諸書所謂^{鳥足之葉}
^{化蝶}菜^菜虫^虫化蝶^蝶而合花化蝶^蝶蔬菜^菜
^{化蝶}樹葉^葉化蝶^蝶或^或綠裙^裙化蝶^蝶 化蝶者甚多 下畧 ○サグ^{サグ}ニ虫^虫蜻^蜻

蛉ト化スサハハ河水ニ生スル虫也夏日炎暑ノ時岸ニ浮ニ寄リテ水
 ヲ離レ自ラ其背開ケテ青キ虫出テ出テ暫時アレハ四翅ヲ生シ色變シ
 テ則蜻蛉ト成ツテ飛去ル 按スルニ水^水蠶^蠶ナルヘンサハハ國各ト見エタリ
 倭漢三才圖會卷五十二曰水^水蠶^蠶 本網水蠶長身如蠶能變蜻
 蛉仍交于水上附物散卵復為水蠶也 按^按良^良字^字也^也 水蠶形畧似蜻
 蛉而灰色露^露眼^眼無^無翅^翅六^六脚^脚纖^纖長^長前^前二^二脚^脚附^附物^物而^而以^以鬚^鬚市^市如^如手^手每^每若^若
 打^打太^太鼓^鼓貌^貌故^故俗^俗呼^呼曰^曰太^太鼓^鼓虫^虫二^二尾^尾纖^纖長^長一^一齊^齊長^長於^於身^身常^常跋^跋行^行泥^泥中^中
 夏^夏月^月緣^緣於^於草^草晒^晒身^身於^於旭^旭乃^乃背^背列^列長^長蜻^蜻蛉^蛉虫^虫去^去則^則為^為蛇^蛇也^也蓋^蓋水^水蠶^蠶乃^乃卵
 生蜻蛉化生者矣

○蛇墓鼠之說 并鼠溺死之液汰

本エノ民ノ云ルハ夏日蛇ノ墓ヲ食イ鼠ヲ食フハ常也然ルニ蛇ヲ食フ
 鼠蛇ヲ食フ墓アリト云フ事アリ其可否ヲ未知然レ凡此例ニ於テ

梁司作

冬日田畠ヲ耕ス農夫ノエヲ穿タル列ニ蛇ノ穴アリ則墓アツテ蛇
ヲ食イ居ルヲ見タリ是等蛇ヲ食フト云フ墓ナルヤト語リ又下民
ノ家屋ニ夜陰墓ノ入ル事アリ人ノ情氣ヲ吸ト称シ来リ下俗甚メ
驚怖ス則捕リテ殺チ捨シ凡必帰リ来リ然ラ其地ノ水筋ノ違イ
カ流ニ放テ用ニ元ノ地ニ来ラズト云ヘリ 倭漢三才圖會卷九曰
食蛇鼠 按唐書曰罽賓國貢異鼠耳喙尖尾赤色能食蛇凡
蛇每好食蛙及鼠而後有食蛇龜食蛇鼠 同卷五十四曰曰父
本網田父蝦蟆大者也能食蛇蛇行被逐殆不能去因啣其尾以
而死尾後數寸皮不損肉已盡矣文字集畧云輪蝦蟇也大如鼯
能食蛇即此也蓋蛇吞鼠而有食蛇之鼠蛇製制豹而有啣蛇豹則田
父伏蛇亦此類耳非怪也 鼠溺此本上ニ於テ每秋河流ニ梁ト云フ
モノテ泥メテ中奥ヲトル也他州ト曰シ國名ウエト云リ是ヲ父ニ伏置朝

揚心ニ奥ト共ニ鼠ノ多ク此梁ニ入リテ死セリ其故ヲ未知也疑フテリハ
落奥ヲ食シト云フニ入テ出ルヲ得スニテ死スルモノカ梁ニハ臆ト云フモ
ノ在テ一度入ルモノ帰リ出ルニ難ケレハ也

○墓合戰

本玉ノ山澗ニ於テ夏五月六月ノ比ニ墓集テ咬合フヲ俗呼テ墓合
戰ト稱セリ其時日ノ定リタルニハアラザレモ昔ヨリ其地ニ行カリ
見タルモノ多シ其集ル處或時ハ數百或時ハ數十也兩端ニ集居テ
雙方ヨリ十廿宛處ニ於テ咬合ト見ルニ頓テ悉ク入り亂シテ或
咬殺シ或ハ咬殺サル双方共ニ友ノ墓實ヲ助ケ合フ又半死ノモノ働
キ得サルヲ友ノ墓ニ背ニ棄セテ已カ群群ノ方ヘ引テ入ルモアリ誠ニ
ト死生ヲ爭フアリサマイツ昂ヘキヤ見ルニ魔魔如クヲボヘテ其終リヲ見
タルモノナシト云ヘリモトヨリ人跡稀ナル溪澗ノ水アル地ニ便リテ

集下聞エタリ未由志考 ○倭漢三才圖會卷五十四曰蝦蟇

種類甚多或時有蝦蟇合戩以為不祥續日本紀云桓德帝

時神說景雲二年七月肥八代郡蝦蟇陣列廣野七丈向南去及日暮不知

去處桓武帝時延曆三年五月蝦蟇二方討後攝州難波南行池列所

三所入四天王寺内米心去著聞集云後堀川帝親覽曰高陽院殿

南有蝦蟇蟄數千為群左右相構而戰或咬殺半死如此數日

京師人爭見之其外姓合戰古今不絕矣

○消火獸ヒラケヌケ并茂任夜火附天狗倒

本云於夜陰山野ヲ往来ス人ノ夢持クル処ノ松明或ハ灯笼ノ火ヲ

陷ス獸アリ適是ニ遭ヘハ下民甚々畏レリ其名ヲバントリト云ヘリ

採スルニ或時此バントリヲ獵師ノ鐵炮ニテ打トタルアリ余是ヲ見ル

ニ稀有人杖也凡頭面ハ猫ニ似テ全身トヲフモノニ尺四方バカリ余

ケタルガ如シ背腹共ニ皮毛バカリニシテ中央ニ唯手鞠ホトノ肉有背

ノ毛色赤ク黄也腹ハ白ク黄ナリ其食ノ如キ四隅ニ至テ短キ四脚

アリ猫ノ脚凡ニ等シ尾ノ真中ニ太キ物アリ長毛背ノ色ニ同シリ

粟鼠ノ尾ノ如キモノ也獵師ノ云ルハ常ニ木ヲマトフガ如シテ居リ

故ニ見難シ難シ其枝ヨリ枝ニ移リ又地ヲ走ルモ甚々疾シ空ヲ飛行

スルニ全身翅ト成ルカ其羽風荒シ老テハ人ヲモマトイ殺ト云ヘリ 倭漢

三才會卷四十二曰鼯鼠クサビモモ木網鼯鼠狀似蝙蝠大如

鴟而肉翅四足翅尾項服毛皆紫赤色背上有蒼腹下黃色喙額

薄白色脚短爪長尾長三尺許其翅聯四足及尾與蝠同以尾懸

而乳子子昂随母後聲如人呼食火烟能從高處下不能從下上

高喜夜鳴取其皮毛與產婦持之令易產能飛而且產故殺其皮

荀子云鼯鼠五枝而窮謂能飛不能上屋能緣不能窮木能

遊不能渡谷能危不能掩身能走不能先久雖多技皆有窮極
也乃至 按 撰者寺島 龍鼠擲肉翅於地上如龍食之俗曰野令民閑
東曰毛如西國曰板折敷以上 ○茂任夜火 本土吉城郡
高原郷茂任村ノ要關ヲ守ル者ノ語リハ深更ニ至テ関舎ノ向フ
ニ谷川ヲ隔テ地ヨリ火ノ燃出ル事アリ故ニ能ク其地所ヲ考フルニ
杉山村ノ地也仍テ獨其火ヲ求メ行ニ近ク至シハ忽火ヲ見矢ヒテ思
シリ此処ト思フア多ク考フルニ敢テ怪ケキモノモ丁ニ既ニ兩三度ニ及
シカ尼前ニ異フナケレハ終ニ其實否ヲ知ラスト云リ 按スルニ是等ハ
地ノ陰火ナルヘシ如此ノ類其故不可計知越後州ニモ蒲原郡女法
寺村ノ民家ニ地中ヨリ火ノ燃出ルト云シ其初メハ甚怪ニタリカ近
世火ノ出ル所圍爐裏ニ用ヒ石ヲ以テ覆ヒ石ノ中央ニ孔ヲ穿テ竹ノ
筒ヲ嵌テ火ヲ出シ毎夜奴婢集リテ專ラ家業ヲ勤ル事ト成ルト也

火ノ用ナキ時ハ手ヲ以テ竹筒ノ上テアラケハ消又又火ヲ呼出スハ常用
ノ附木ト云フモノニ硫黃ヲ竹筒ノ上ニカザセハ則火出也石ノ完ニ取メ
タル竹ノ筒モ不燔也 ○天狗倒 本土ノ山中ニ材木ヲ伐出スル人
ノ語リケレハ深山ニ入り其業ノ終ルマテ住スルテ松小屋ト云松人ノ
多少ニヨワテ廣狭アリ野猪身餘ノ獸ノ破ラサル為木ヲ厚ク割リ
四面ニ建テ堅固ニセリ晝ハ山溪ニ分レ行終日ツトノ暮ニハ元ノ小屋
ニ集リ又他ノ人跡ナケレハ常ニ寂莫ニ習シ怪シキニモ遭サレハ大石
ヲ落シ大木ヲ折ク音日中俄ニ闇夜ノ如キコトアリ是等ヲ天狗倒ト
云イ山ノ荒ルヒ云ヘリ是等天狗又ハ山神ノ人ノ耳同ク驚カスル
感レト可謂モノカ又夜陰枕上ニ碓ヲ打ツ夏霞ノ如シ耳タル松
人ノ云ヘルハ鼻高殿ワルサメサルナト云ヒテ寢又朝ニ見レハ木ノ葉
ニテアリケルト云ヘリ

○飛彈黑坊之說

本エノ深山ニ黒坊ト云フモノアリ猴ノ如シト倭漢三才圖會等
ニ見エタリ古ノ夏ニヤ今ハ其改汰ナシ猴ハ山中ニ甚夕多シ其地ノ
民常ニ投ツテ男女食物ノ一助トセリ至テ長大ナルモノ収カラス
○倭漢三才圖會卷百十曰 獾 本經獾老猴也似猴而大也
蒼黒能人行善獲持人物又善顧躬純牡無牝善攝人婦女為
獨生子 獾 神異經云西方有獸名獾大如驢狀如猴善
緣木純牡無牝群居要路執男子合之而孕此亦獾類而
牝牡相反者 按 撰者寺島 飛驒美濃深山中有物如猴而大
黒色長毛能立行亦善為人言豫察人意不敢為害山人呼
名黒坊互ニ不怖如有人欲殺之則黒坊先知其意疾遁去故不
能捕之盖此獾之屬乎不知純牝純牡之是非耳

○熊膽之說

本エノ山中ニ熊アリ猶北國ヨリ来ルモノ亦多シ國ニテ熊膽ヲ重シ
ズルノ人多ク比セリ凡テ冬ニ膽ヲ上品トス通稱之熊ト云フ必元居スル
バカリニモ非ス古木ノ心ニ虚等ニモ隔ル其秋ノ膽ヲ下品トセリ其餘
屬膽ノ説を多シ 按スルニ或曰凡テ膽ノ皮色黄ナルヲ上品トス此黄
皮モ膽枯サル初メハ黒ニアリ年月ヲ經ルニ随テ黄バミ出ツ故黒
皮ナルモノハ其次トス黒シ黄バミ班ニシテ黒キハ燻色青キヲ無スルモノ
又其次也膽ノ小大共ニ其重子厚子見ル處ヨリモ量目重キモノ真タ
リ仍テ重子薄ク量目輕ク皮薄クシテ黒ク其内キハ或ハ疑也或ハ偽
也真膽刻ニテ肉色黒漆ノ如ク光リ星ノ如シ又古墨ノ如クホツコリト
光アルモノ其次トス共ニ真也故ニ摺碎キ細沙シテモ猶變セズ偽作
ルニ摺碎スルハ忽チ黒色亂レテ燻色黄色或ハ青ミアリ碎ケル

ニ腕モロノ又膏アヲ出ルアリ真ハ口裡ニ入テ古上冷トシテ先耳ニアッテ
後ニ若ク香氣臭ニ通シテ清シ偽ハ先ツ苦ク和氣無シ香氣ト云フ
毛腥エニクサク臭ニクサク蒼アヲ嗅シ皆不ハ也凡テ冬トキ正月春正月ノ膽ヲ取上
トス是膽液十分ニ盈テ一度乾シ修ユクメバ其月ト云ヘ凡不温
十月ハ未滿二月ハ大既ニ崩キ又次トス三月ハ大既ニ動シテ猛キキ
時ナハ不宣ハ夏月ハ膽衰ハ也秋ハ膽液悉ク減ス各下品
ナリ是等乾キ不清一度乾キキテモ夏日ニユルムモノハ未滿不ハノ
膽ナルカ故也猶熊膽ノ真偽ヲ試ル法多シト聞エタリ詳ナルニ不
○倭漢三寸首會卷第廿八曰 熊音雄和 木細熊生山谷架ハ
死而豎目人足黑也性輕捷好攀緣上ハ高木見ハ之則顛倒自投ス
于地ニ執ス入ル穴ニ春乃出春夏臙肥時ハ皮膚存助ハ考ハ每牛ハ不引氣或墮ス
地ニ自快俗呼ハ蹠ハ蹠ハ冬月蟄時不食ハ饑則ハ舐ス其掌故其友在掌謂ハ

之熊ハ其性惡穢物及傷疾捕者置カ此物于穴則令死自死或為棘
刺所傷出穴ハ之至骨則即斃也性惡食之即死又云熊居樹乳
中ハ人攀樹呼ハ為子路則起不呼則不動也 熊膽結治時氣熱
盛變為黃疸者夏月久ハ刺心痛治諸疝驚癩瘰癧退熱清心平
肝明目地黃 膽春迄百夏在腹秋在左冬在右是熊膽多偽
以糸ハ和許ハ熱水中運轉如飛者真余又搗但緩ハ又真者善碎塵ハ
試シ之ハ以淨水一器塵ハ其上投膽末請則疑塵ハ然而問 ○新
六帖唐家 白雪ノフル木ノウツホスハカトテ太山ノ熊モ冬エモルナリ
○佛法僧鳥所嶽鳥
本土深山ノ中ニ國名嶽鳥ト云鳥アリ或曰是佛法僧ト稱ス鳥
ナルト云ヘリハ深山トイヘ凡多ク在ニテハ無シ適見ルハアリト云フ
按スルニ佛法僧鳥ハ其聲佛法僧ト稱ル故ニ三寶鳥共稱ストナリ

本文詩祝
了字則
了字

然レモ本土ニオイテ此鳥深山ニノミアリテ村里ニ遠ハス其囀ル聲ヲ
聞タル人モナケル其可否ヲ未知也状ハ鶴ニ似タリ頭頸背ハ翠黒色
ニシテ光アリ嘴ト足ハ赤シ雌雄モ分明ナラスト又野州日光山ニ
慈悲心ト囀ル鳥アツテ其名ヲ慈悲心ト呼ベリ各其囀ル声ヲ以テ
稱スト見ヘタリ ○本朝語園曰ク性靈集云弘法大師佛法僧ノ
鳥ヲ聞ユイ詩ヲ賦シテ曰 寒林獨座草堂曉三空之聲聞一鳥
一鳥有聲人有心性心雲水俱了了 高野山ニ今モ此鳥アリ
ト云ヘリ歌ニモ多クハ見ズ松尾ニヨミ合セタリ 下略

○雷鳥附嶽鳥并雷鳥雌雄之音

本土騎鞍嶽ニ雷ノ鳥アリ國名嶽鳥ト云ヘリ此餘山嶽高峰多
シトイヘモ曾テ此鳥在ルヲ不聞ヌテ騎鞍ハ古ヨリ俗説ニ魔所ト
号シテ容易登山センモノ無シ元來此鳥山下ニ遊ハサレハ状羽色等

國説區ニシテ分明ナラスハ碑ニ傳フル処雷鳥ハ加賀ノ白山哉中
ノ立山飛躰ノ騎鞍ニアリト也他ハ未詳然ルニ延享元甲子余在國
ノ時依 台命而當嶽ニ人ヲ登セ雷鳥ヲ授ラシメ研餌ヲ以テ飼日
養イテ江府ニ獻セリ故ニ其聲畧ヲ載ス猶山上ノ夏ハ神祠部若
城郡騎鞍權現ノ條下ニアリ ○雷鳥 或作賴鳥又鴉鳥其
狀雌雄トモ凡山鳩ノ如シ雄ハ嘴青ク黒ク眼ノ上縁ニ鳥冠アツテ
其色鷄冠ノ如ク美也頭頸胸背尾ニ至ルニ黒シ其中ニ栴色ノコマ
カナル鳥アリタトハ鷄冠ノ形ニ似タリ兩翼ニ白色ノ班アリ腹ト兩
翼ノ裡ニ白シ尾ノ羽數十四片也兩足ハ山鳩ヨリ大シ高シ且ヨリ爪
際マテ白キモアリ獸毛ノ如ク足ノ裏黒ク前爪三ツ常ノ如ク後ノ爪ハ
甚短シ人ヲ見テハ鳥冠ヲ立テ尾ヲ被レリサナガラ弱子ヲ聞キタル如
テ養事也雌ノ狀雄ニ異ナシ羽翼栴色ニシテ野鷄ノ雌ノ形ノ如

ニテコカナルモノ鶏ノ魁ニ似タリ鳥冠アレハ義ナラズ雌雄ニ聲ハ
異ニ似テカ引其響キ堅ク也仍テ此時雌雄五羽ヲ捉得タル処ニ
雄ニツト死セリ其餅袋ヲ覆リ見ルニ草栢植ノ如ク黒キ實アルモノ
ト杉葉ニ似タルモノアリ是山上ノ岩石ニ生シテ苔ノ如アリシト登
山ノ族悉ク携ヘ来レリ則餅餅ニ和テ飼フニ三日ホドニシテ研餅ヲ
食テ故ニ雄ニツ雌一ツヲ上リ昇ス ○正治百首和歌後鳥羽帝

御製 シテ山ノ松ノ木陰ニカクロイテヤスラニヌメル雷ノ鳥哉 此上外
證考

○雷鳥之記 高師儒士伊藤
元藏長嶺述作

越之白山有鳥其名曰鶴字出爾雅朱冠玄衣青脚趾
白腹翅端黃白如鶴甚愛其子白山高寒四時常有
雪頂下有坂曰五葉萬松環植数十里此鳥棲宿其
間而未嘗他遊人所希見偶有觀者以爲瑞云能除

火災

後鳥羽帝嘗有聖製和歌贈友人只州豪小村氏友梅科世
更奉山聖締盧山腹以休登陟者之勞上山者數矣竟獲親
之圖而傳之是時風早中納言實種卿奉進

上皇宮

宣圖其像亭子寶永戊子之災亭免于燬屬者友梅奉頌
卿令孫實積親辱以

聖製題其上慎屬予記之云

皆享保十四年己酉夏四月也

長胤謹書 以上

○雷鳥雌雄之圖
 麴之白山有鳥其名爲雷鳥
 之大類千鳥其身爲狀之步前
 白腹玄長脚斑斑着白毛
 翅端若手長或稀而田雞並
 盛之昂道志之相沙瀉之屬
 白山之鳥也而實面時有雪飛
 鳥人手捕生之介志壹日下陽
 峯嶺空州長心爲以爲屬又云
 依之衆人 後鳥相爭志壹
 石之衆志壹一自勝人人口矣
 余友真柳踪是日宿白鳥僧
 房中陰之有鳥之相爭相之
 離而冰在陰其狀如此因世之
 騷後志壹必者因出以鳥或
 失直志壹之者若柳踪之
 志也

文元甲戌夏四月
 養洲 高泉道之識

雷鳥出圖

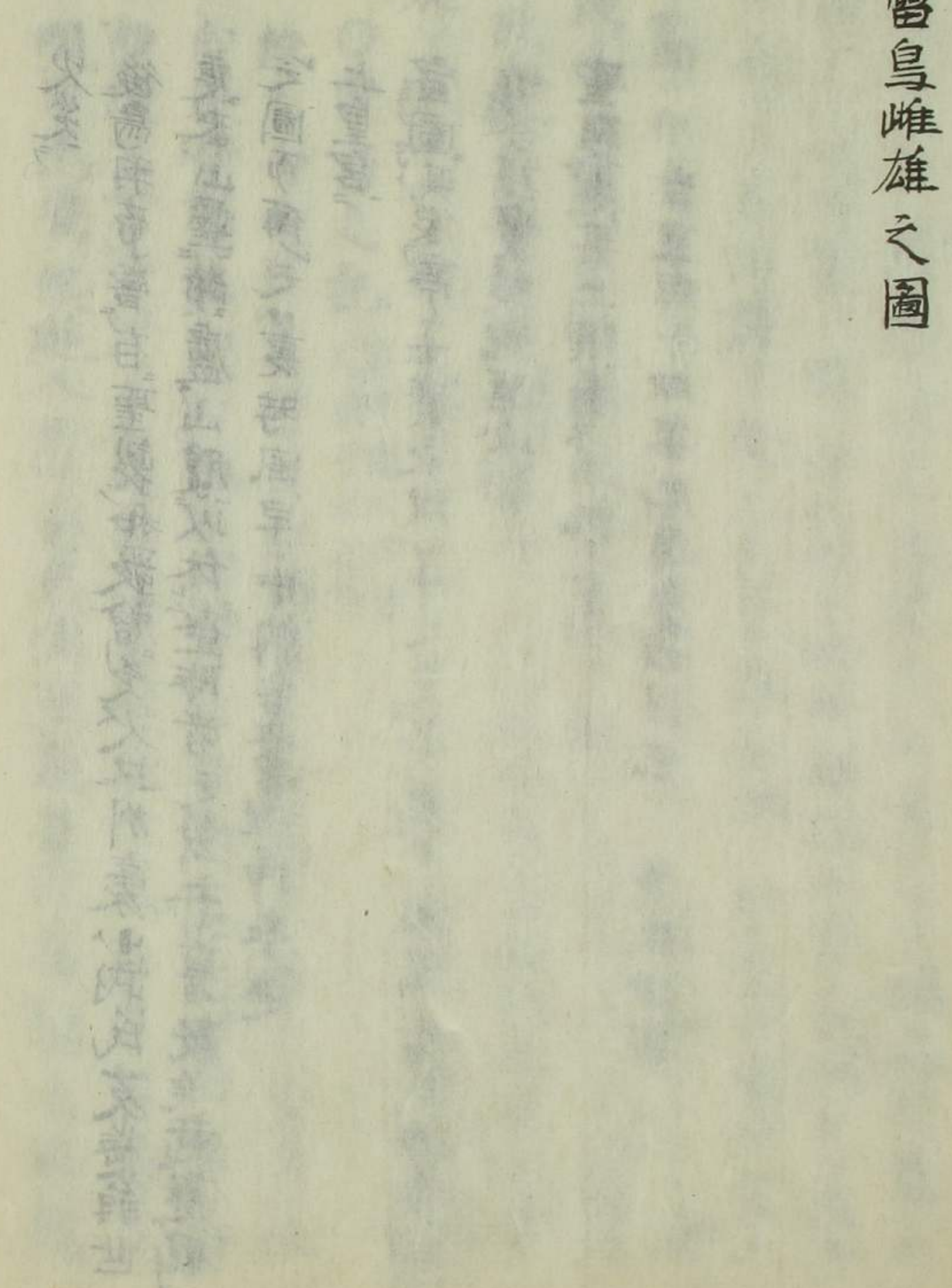


○稱謂言語

本エニ於テ民ノ通稱トスル処ノ國言ヲ載ス猶此餘解シガタキモノ多
 シ詳ナラサルニ及サス ○ヤタ 船ノ穂ヲコキ落シタル其 藁ニ残ル所ノ板ヲ云フ ○アラモト 禾ヲ
 或ハ春トキ刈レシコボレタルモノヲ他州ノ俗アリモ ○エルゴ 禾ヲ芽節ニテアルイ
 トニ云ニ等シ糯多カレノ音アラノ訓アレハナリ ○ボウ 男見也 ○ビイ 鹿
 ○セイナ 休ナレ ○ヲヤス 村里ノ名ニ庄屋ヲ民ノ敬シテ 〇チノ 祖父ノ
 ○ナボウ 祖母也 ○ダミ 母ノトモトモト云ハ他州ト云ヒ ○ボウ 男見也 ○ビイ 鹿
 ○ダシ 子共ト ○ゴリヨウ 少女ノ妻也 按スルニ本邦ニ於テ高貴ノ女兒ヲ御料人
 ○ゴレン 娘也 ○マノ 乳母ノ妻也 按スルニ柘草子春曙抄ニ僧都ノ君ノ御ノト
 ○マラ 我ト云 ○ヲラ 我等 ○アンシユ 世俗アリ衆 ○威名 衆
 民ノ古昔其銀主ニ對シテ切ラ立感状 ○威名 田目上田畑等ヲ得テ ○家抱
 等ヲ得タルモノヲ他人ノ稱スルモノナリ ○威名 田目上田畑等ヲ得テ ○家抱
 是元赤民ノ僕タルモノ別家ニ出テ民トナル也 ○威名 田目上田畑等ヲ得テ ○家抱
 誰家抱ト云ヒテ古来一戸ノ民ニハナラサル也 ○威名 田目上田畑等ヲ得テ ○家抱
 ナルカ ○カマナ 民家ニテ上 ○ワカタ 上ノカト云也 ○ウレ 上也
 座ノ豆也

○雷鳥雌雄之圖

Handwritten notes at the top of the right page, including the title '雷鳥雌雄之圖' and various characters and symbols.



○編詔言語

- 本エニ於テ民ノ通稱トスル処ノ國言ヲ載ス猶此餘解シガタキモノ多シ
- ヤタ 船ノ穂ヲコキ落シタル其
 - アラムト 撰ミ
 - ヤサス 村里ノ名ニ庄屋ヲ民ノ敬シテ
 - チノ 祖父ノ
 - ナボウ 祖母也
 - ダミ 母ノトモトモトハ他州ト云ヒ
 - ボウ 男也
 - ビイ 直
 - ダシ 子共ト
 - ゴリヨウ 少女ノ妾也 按スレニ本邦ニ於テ高貴ノ女兒ヲ御料人ト云フ者トキ残レシコボレタルモノヲ他州ノ俗アリモ
 - エルゴ 禾ヲ芽節ニテアルイ
 - マ 乳母ノ妾也 妾スルニ枕草子 春曙抄ニ僧都ノ君ノ御ノト
 - マラ 我ト云
 - アンシユ 世俗アリ衆
 - 威名 衆
 - カマナ 民家ニテ上
 - ワカタ 上ノカト云也
 - ウレ 上也
 - スマ 鴈也
 - チヤウダイ 民家
 - ワカ ウカケタ畧語カ
 - ウレ 上也
- 民ノ古昔其親主ニ對シテ切ラニ感ホク等ヲ得タルモノヲ他人ノ稱スルモノナリ
- 威名 田目上田畑等ヲ得テ
- 家抱 誰家抱ト云ヒテ古来一戸ノ民ニハナラザル也
- カマナ 民家ニテ上
- ワカ ウカケタ畧語カ
- ウレ 上也

○アヲト 山川村里トモニ 其始之入り口也 ○ハエツボ 穀物ヲ藏ムル 妙也 稗坪成カ

○ヲチ 外地ヲ云フ 大路ナルカ ○エヅヅ 榎木ヲワタシタル橋ヲ云フ ○布川 下田ノ号

○サラ田 上田ノ号也 是水ヲ 乾テテ作ル田ナリ ○アト 田ニ水ヲ入シ或ハ 水ヲ流ス其水口

○アハラ田 同上 ○ヤキダテ 野猪ノ皮ヲ取シツ、率ニハサシ火ニ焙 野猪ヲトシ 凡テ野猪

○ソメ 田島ニ在リ鳥ヲトシ也 ○ヤキダテ 野猪ノ皮ヲ取シツ、率ニハサシ火ニ焙 野猪ヲトシ 凡テ野猪

○ドウツキ 是モ鳳シナリ引取ト云ニ同シ流水ニ ○野猪 野猪ヲトシ 凡テ野猪

○ラセ 同上 ○熊落 熊ヲ捕ル 凡テ中真 ○イナバギ 薤ノ 薤ノ

○サウゲ 塩筍ノ 薤ノ ○ツブラ 薤也 下田ノ号 ○カチ 檜也

○アツポ 餅ノ也 他州ノ号 ○ヒラカ 下田ノ号 ○イシナ白 石臼ノ 支也 ○カチ 檜也

○アムシヤレ 食物ヲス、 ムル支也 ○ウ 湯ノ支也 俗ユテラウツル 又ウト通セリ

○マダシ 用意ノ ○ガツト 大分ト 云支也 ○タラ

○フダシ 同上 ○フダシ 同上 ○フダシ 同上 ○フダシ 同上 ○フダシ 同上

○デカイ 凡テ大キナ ○ブンブ 小思ヲ背ニ負フ也 他州ノ俗ヲフクト同 ○アフ

○ライ子 凡テ物ヲ背ニ負フ也 他州ノ俗ヲフクト同 ○バカテツ 是計

○オゼ 本枝木 ノアラナリ ○クセ 叱カヘ越マセ ○テキナイ 若

○ラウガイ 凡テシキ 支也 ○スカヌ 不直支或ハ 氣味香

○フンギヤラカセ 踏倒ス也 他州ノ俗 ○キツ

○ギヤメク 換 ○ヌマクワラ 泥也 ○イマ

○マイキガ 傍若無人ニ 振舞支ラヌ ○キヤツ

○ソコナデ 俗ソコナノマ リト云ニ同シ ○アカム 曲也 ○シユケル

○ホケル 聡 ○トコシヨ トコシ人 ト云支也 ○ゼンセボウ

○サカヨル 榮 ○オケル ナリ ○ヤド 家至他行セシ 留守ノナリ ○ヨリ

○ギノフノバン 一昨晩ト 云事也 ○ヨリ

○サカヨル 榮 ○オケル ナリ ○ヤド 家至他行セシ 留守ノナリ ○ヨリ

○ギノフノバン 一昨晩ト 云事也 ○ヨリ

○ギノフノバン 一昨晩ト 云事也 ○ヨリ

○ギノフノバン 一昨晩ト 云事也 ○ヨリ

○ギノフノバン 一昨晩ト 云事也 ○ヨリ

カエル フリカエ ○ヨボル 呼也 ○アヤホヤ 彼是ト云 ○マニヤノ 物ノ間

○イチケシ振舞 婚姻ニ於テ始メテ其門クルモノ祝會スルコトナリ ○チツトシヨウ 又

○シヨモシヨウ 又大シヨモシトモ云 ○テウ 是マコト也ト云事

○雪ヲコシ 冬ノ日雪降ラントスル時山ノ鳴ルヲイフ ○テウハイ 年始ノ礼ヲ云也

○島中参りタリ 山家ノ民羊礼ノ言也ハタウキトハ耕作ノ度島ヲハ打ト云ハナリ ○綿脱参り 同上

○民間月令

本エニ於テ稱スル羊中ノ嘉節習風ヲ載ス

○正月 松飾 恵方棚 蓬萊 屠獲酒 ○七種粥

十五日之小豆粥 廿日正月 以上他州 口祝 年始ノ振舞也 節分

家室ニ於テ大豆ヲマシ門ヲニ窮ノ頭ヲサス他州ト同シ枝ハ用イヌ鬼ノ頭ト云モノヲ用ユ是幅一寸カニ長一尺ハカリ木ニ上ニ鬼ノ頭ヲ書下ニ墨節ヲ横ニ引ラ當中ノ羊ニハ此節 十三閏月ノ在年ハ十二ヲ記シテ門ニ立ルヲ風トス俗訛ニ云ク此夜鬼未テ是ヲ見ルニ墨節其羊ノ月數ニ異タルニ不審ヲ成ス止古ヲ得スシテ數ノ節是ヲ

祝捧

古來兒童ノ弄トスル物ニテヌルテノ木ヲ長一尺計ヲ推テ去年婚姻マシ家ニ行テ女ノ背ノアタリヲ打テ祝フ支トスル也 按スルニ枕草子春曙抄ニ十五日ハモチカニノセクト云下ニカニノ木ト出タリ 註云ク此木ニテ腰ヲウテハ子ヲ産クマシナイト下畧今此州ノイワイホウモ此遺風ナリカ

○二月 初手祭 蚕玉祭ト稱シテ蚕ヲ養フモノ 是ヲ祝ス 稻荷ノ神支ニハ非ス 涅槃會 寺院ニ於テ画像ヲ出シ犯ス他州ト同

○三月 三日上巳 雛 桃酒 艾草餅 以上他州ト同

○四月 八日佛誕生會 花堂ヲ造リ誕生佛ヲ出ス他州寺院ト同 五日端手 稚子ヲ着用ス擔ニ葛蒲

○五月 朔日 民家多兒童戯ヲ立ツ他州ト同 四日 葛蒲湯 五日端手 稚子ヲ着用ス擔ニ葛蒲

○六月 朔日 氷餅ヲ祝 下民温飽ヲ食フトス来由未考 土旺 餅ヲ祝食フ

○七月 朔日 今日ヨリ寺院ニ於テ施餼鬼ヲ始メ執行ス 六日 民ノ兒童今夜セタノ祭ヲイタス凡テ

カケ火ヲスナリ七日ノ朝悉取リ捨ルナリ 七日七夕 強敵ヲ祝イ食ス硯ヲ洗フ支他州ニ同

十三日 五箇蘭盆 民家ニ於テ聖霊ヲ柙ラ造リ灯笼ヲ燃ス迎火ト号シ火ヲ焚テ他州ニ同シ 十六日 送火 他州ニ同シ

吉左右踊 民ノ見章ノ踊也 赤申踏歌部ニテ

○八月 朔日八朔 下民ハ佳節ト知ルニシテニシテ祝フニハ及ハス 十五日 名月 他州ニ同シ

○九月 九日 重陽 衣服ヲ改ム今日強飯ト醴ヲ調ヘテ各其氏神ニ供ス 十三夜 今宵名月上云テ知ルモノ稀也猶

祝フニハ及ハス

○十月 初亥日 下民玄猪ハ不知也此日白鳥ヨリ丸テ第テ取家屋ニ収メ貯ルヲ始トス 廿日 惠美須講

此或アリトイハレ 一等ニ祝フニハナシ 鐘納 其日ハ定ラス人ノ石同也是民秋成テツトノ終リタル祝フ也他州ニ同シ

○十一月 廿三日 大師強他州ニ同シ

○十二月 臘八 無量障ト云イハ日フキニニテ専ラ奴婢ノ祝フ事也 除煤 他州ニ同シ 餅春 他州ト同シ

温故 祠跡

○御宮跡

在于大野郡灘郷西一色村東曜山松蔭家寺之後山東照宮ノ御跡也金森得代ノ時御宮ヲ易ル

○本宮跡

在于同郡川上郷新宮村甲賀山末由未詳

寺跡

○龍泉寺跡

在于益田郡下原郷和川村大鹿野末由未詳

○長慶山潮音寺跡

在于同郡同郷中津原村末由未詳往古ノ本尊觀音大士ノ像今ハ草堂ニ安置セリ 佛工赤考 古牌一基古棟札一片アリ ○牌面之銘開基明室道光菴主 傳説年代未詳 ○古棟札之銘 三尊金

堂供養奉造五中津原村中敬白慶長二年卯月吉

鳳慈尾山大威德寺跡

在于同郡竹原御野村或曰鳳慈尾 作傍至尾國説曰當山ハ古鐘倉石大

將家御願ノ旨アリテ大伽藍ヲ州創シタマフヘシトテ其地ヲ諸

州ニタツ子来メラル于時永雅上人其命ヲ奉シテ永雅傳説市詳 天覺上人氏云リ

昔ク國々ヲ巡リテ當州ニ来リ此山上ニ至ルニ山溪寐莫トシテ

心モヌメル折カラ山頭ノ池中頻ニ鳴動シテ大龍顯ル出ツテ

時永雅願ハクハ其真容ヲ拜セン事ヲ祈念セシニ大龍勿心中童

ノ尊容ト變シ牛ニ乘シテ出現シ永雅ニ告タマフ事アリ則

其尊容ヲ寫シ留テ大威德明王ト稱ス右大將家其聖地先克

ヲ感タマヒテ本堂講堂ヲハシメ其外塔頭十二坊ヲ建ラレ彼

尊像ヲ安置シタマフ處ノ聖場是ナリ則明王出現ノ池其外

鐘倉銀杏杖父杉ナド稱スルモノ今モ山上ニ存ス是等

諸候ノ寄附トシテ各其地ヨリ移シ植ラシタルトナリ并ニ

御厩野ノ号モ諸候群參ノ時麓ニ馬ヲ繫シアリサテ稱

シテ山下ノ地名トスト云フ其後州内兵乱久シクシテ修補

ヲ加心事モ叶ハズ自寺坊荒廢ニ及ヒタリシニ剽天正年中地

震ノ為ニ破ラレテ一字モ全カラス飛州大地震ハ天正三 年己亥十一月晦日也此時再

建ノ力盡僧侶各他邦ニ離散シテ悉廢絶スト云以上 按云

ニ其十二坊ノ一數多門坊ノ住僧慶後ト云汝門濃州長滝寺

ニ行テ其塔頭阿名院ニ任セリ彼院ノ經文未書ニ舊寺ノ

夏ヲ誌セシモノアリ故ニ次載ス今阿名院ニ存在スル處ノ書ヲ

詳ナルニ又長滝寺ハ美濃州郡上郡長滝ニアリ以テ寫之猶妙外ニモ有ハレシト往古春澄大

師開闢ノ名藍也則阿名院所在經文未書云○本堂大

間五間四方地藏堂大馬堂講堂鎮守拜殿鐘樓堂三重塔二
王堂坊敷十二坊東ノ坊多開坊南坊竹林坊西ノ坊聖林坊
吉祥坊北ノ坊寶光坊池ノ坊滿月坊福成坊上本尊ハ大
威徳明王塔ハ大日如來鎮守ハ伊豆信根熊野白山四所也寺領
門前和泉橋ノ境北ハ加賀ナシ谷通り尾ヲ境東ハクニカケ白
山ノ尾舞臺西ハ野尻山境按スルニ和泉橋以下ノ地名卷ノ寺跡ノ近邊ニアリテ今モ稱守護不入也
兼政之村寺領之田一町一反按スルニ益田郡兼政村アリ上田之内ホキクテ二十貫
トアルハ永ノ敷ナリ何石ト云フニ同シ古代ノ法則ナリ按スルニ同郡跡津村アリ跡津大ゴウリ二十貫
接スルニ同郡跡津村アリヲゴウニ大般若田ニ反按スルニ同郡跡津村アリ天正五年丁
文林鐘下旬慶俊記之以上

○福永寺跡

在于同郡同卿宮地村末由赤詳

○正福寺跡

在于同郡中呂御羽根村末由赤詳里人ノ口碑ニ傳ルル處往古行基菩薩ノ開基ナルト稱ス永祿天正ノ間ニ廢スルモノカ行基彫刻本尊觀音ナリ其時他邦ニ移シテ其跡在分明ナラス今ハ古ノ鎮守天王ノ祠藥師堂等旧地跡ニ殘レリ○日本鹿子卷第八飛騨國條下曰正福寺川根ニ建曹洞宗本尊行基菩薩作个手觀音云云猶倭漢三才圖會國華萬葉集等ノ説モ日本鹿子ト同シ村老云ク川根ノ号ハ赤勘此地ハ古羽根氏ノ人開發セシテ以テ此号アリト云ヘリ川根ノ字形近シ

○玉蓮寺跡

在于同村末由赤詳是正福寺ノ塔頭ナル云リ

○律國寺跡

在于同郡同卿宮地村末由赤詳

在于同郡上呂郷上呂村字井戸末由寺詳

○大光坊跡

在于同村末由寺詳

○寺跡

在于同村字寺洞寺字末由寺詳

○珠數輪山昆沙門寺跡

在于同村現在開水山龍泉寺ノ旧地也

○禪應寺跡

在于同郡同郷宮田村末由寺詳

○五龍寺跡

在于同村字井戸末由寺院部叢堂ノ條下王ノ御堂譜中ニ出ス

○爾遠寺跡

在于同村末由寺詳

○達磨堂跡

在于同村末由寺詳

○龍澤山禪昌寺跡

在于同郡萩原郷櫻洞村是同郷中呂村現在龍澤山禪昌寺ノ舊地也

○景劉院跡

在于同村末由禪昌寺ノ譜中ニアリ今ノ俗ケイリン島ト言是也

○陽松菴跡

在于同郡同郷西上田村末由寺詳

○西方寺跡

在于同村今天平小祠アリ往古ノ鎮守ナリト云現在惠日山東

禪寺ノ舊地也

○靈宝山真福寺跡

在于同郡同鄉中呂村 本尊藥師如來今ハ葦葦堂ニ安置シテ山ノ坊ノ藥師ト稱スル是也 往古未詳或云此邊スヘテ櫻洞ノ御前ト云ル高山ニ接アル地也 往古御前山ノ寺院ノ其一數ナリト云

○無量寺跡

在于同村未由未詳或云阿弥陀堂屋鋪凡云

○慈眼菴跡

在于同郡同鄉上村未由未詳

○少林菴跡

在于同村未由未詳

○比丘尼寺跡

在于同村未由未詳

○千光寺跡

在于大野郡備郷西一色村松倉山 是往古三木大和守自經松倉居城ノ時同郡下保村架波山千光寺ノ里坊跡也

○普門院跡

在于同村 千光寺塔頭ノ跡也

○善應寺跡

在于同村 未由未詳

○清鏡寺跡

在于同村鴻巣森 今ハ東曜山松泰寺トナル

○八幡山淨光寺跡

在于同郡同鄉苅里村未由未詳 里人云往古松倉ノ城主三木氏

在世之時州内寺院四十八寺ノ總録所也

○來迎寺跡

在于同郡同郷江名子村未詳

○高雄山神宮寺跡

在于同郡川上郷新宮村新宮之森 里人云ノ往古新宮白山ノ

神祠衛護ノ寺也廢絶未詳 今世モ此地歸ノ土底ヨリ

伽藍ノ古礎或ハ梵文ヲ刻ル五輪石ノ類ヲ掘出ス其アリ又田

畠之異名ニモ御幣田鳥帽子田鐘樓田長老田ト唱フルアリ

○伽藍跡

在于同郡同郷下之切村未詳

○宗統寺跡

在于同郡同郷三日町村未詳

○寶雲山三佛寺跡

在于同郡大八賀郷三福寺村未詳 ○現在同郡一宮祠

藏經文後書云 貞治三年甲辰飛騨州小八賀郷寶雲山三

佛禪寺東向寮西向寮云云 按スルニ古昔ハ小八賀郷ナルモノ

後世大八賀郷ニ入タルモノト見ヘリ又村名モ中古以來ハ佛ノ字

ヲ改メ福字ヲ稱スト云ヘリ

○松林寺跡

在于同郡小八賀郷下保村 里人云ク往古ハ八賀郷ハヶ寺ト

稱シテ古禪刹ハ數アリ其一也中古六箇寺廢シテ今世ハ千

光寺正宗寺兩寺残リ又此松林寺ノ祖像ハ廢寺ノ後有

故而同郡高山現在高隆山系系女寺ニ安置ス古物殊勝ノ

木像也

○千藏寺跡

在于同郡同鄉町方村 是八賀郷八箇寺ノ廢寺跡也今ハ千藏寺ノ本故ト稱ス熊野三社ノ祠アリ

○無量寺跡

在于同村 表由同前

○六仙寺跡

在于同村 表由同前

○定光寺跡

在于同郡同鄉山日村 表由同前

○東光寺跡

在于同郡同鄉添垣村 表由同前

○長顯寺跡

在于同郡同鄉坊方村 表由未詳

○大衆坊跡

在于同郡同鄉大萱村今ハ大衆坊ト云 表由未詳

○照泉寺跡

在于同郡久野郷宮村 表由未詳

○横河山安寧寺跡

在于吉城郡吉城郷半田村 里人云ク往古本尊藥師如來今同郡同郷西門前村現在太平山安國寺之境也ニ安置シテ横河藥師ト稱ス是也

○常樂寺跡

在于同郡同郷西門前村 現在太平山安國寺往古塔頭ノ其一也

○正回寺跡

在于同郡同鄉八日町村 末由同前

○十五堂跡

在于同郡同鄉三日町村 末由未詳此舊堂ノ鐘ハ今大野御七日町村現在醫王山國分寺ニ存在セリ鐘銘ニ見エタリ

○安房山清峯寺跡

在于同郡同鄉鶴巢村 末由未詳往古本尊聖觀音今ハ州堂ニ安置セリ 州内ニ於テ七觀音ノ一數鶴 按スルニ益田郡久津宮祠藏現在大般若經後書云 正和二年正月五日於飛騨國清峯寺長光院書寫 下畧是ナルハヤ 歟

○光壽菴跡

在于同郡廣瀬御上廣瀬村 末由未詳

○圓光寺跡

在于同郡同鄉袁輪村 太平山安國寺往古塔頭ノ其一也

○林昌寺跡

在于同郡古川御宇津江村 今世同郡古川町現在五峯山林昌寺ノ舊地也

○文道寺跡

在于同郡小鷹利御三河原村 今世ハ文道寺岨ト云末由未詳

○寔合寺跡

在于同郡小島御杉寄村 末由未詳 里人ノ口碑ニ傳フル處當野小島ノ城主小島右近將監時光菩提也此寺ノ大般若經今世同郡大江村現在南光山壽樂寺ニアリ 時光末由古城部ニ載ス

○本堂跡

在于同郡同鄉袈裟丸村 末由未詳 是杉崎村寔合寺ノ本堂

十九カ杉寄加裝變九共三地圖也

○時々菴跡

在于同村 未由同前

○經藏跡

在于同村 未由同前

○奥御堂跡

在于同村 未由同前

○大昌寺跡

在于同郡高原御森茂村 未由未詳

○宗徳寺跡

在于同郡同郷伊西村 未由未詳

○長久寺跡

太平山安國寺古塔頭ノ其一也

在于同郡同郷茂住村 未由未詳

○赤御堂跡

在于同郡同郷本郷村 未由未詳

舊宅

○下原旅館

在于益田郡下原郷下原町昔金森法印別荘旅館ノ地跡也

○小林屋鋪

在于同郡萩原郷花沱村 往古小林七郎右衛門某居住地也 未由未詳

○内記屋鋪

在于同郡同郷上村 永正年中内記新七郎賴定居好ノ跡ナリ 同郷萩原町現在諏訪神祠ヲ勧請セシ人ナリ

同前 ○ 桑原屋鋪

在于同郡同鄉東上田村 往古桑原雅樂今居呀ノ路也 未由未詳

○ 千場保木

在于同村道路ノ名也 濃州口ノ本道難呀タリ 往古千場氏某由未詳 此邊ニ居住シ始メテ此道ヲ開ク故ニ名トセリ 保木ハ枝アル木ヲ數テ上ヲ覆イタル道也

○ 萩原屋鋪

在于同郡同鄉萩原町 金森法印州内旅館ノ地跡也

○ 化物屋鋪

在于同郡阿多野郷下之向村 未由未詳

○ 赤生殿屋鋪

在于同郡同鄉赤生村 里人云ク往古此地ニ高貴ノ人來リ住セリ後

村民敬イテ赤生殿ト稱スト云フ 未由未詳

○ 大西殿屋鋪

在于同郡同鄉阿多野郷村 未由同前

○ 中島殿屋鋪

在于同郡同鄉黒川村 未由同前

○ 水口殿屋鋪

在于同郡小坂御小坂町村 未由未詳

○ 安藤屋鋪

在于同郡同鄉赤沼田村 往古安藤小十郎某居住ノ地跡也 姓氏未由未詳

○ 佐渡屋鋪

在于同郡同鄉長瀬村 未由未詳

○長者屋鋪

在于同郡同御落合村 里人云ク此所民家ヲ去ル莫五里餘ノ山奥ニアリ落人ノ隠レ住レ地ナリト云フ又カタハラニ先刑ヲ行イレ處ナリトテ字ヲ首討ト稱スル地名アリ

○雲山屋鋪

在于同郡上呂郷上呂村 是同郷櫻洞城主三木右京大夫藤原良頼入道雲山居所ノ跡也

○滝殿屋鋪

在于大野郡久之野御宮村 未由未詳

○禪入屋鋪

在于同郡 未由未詳

○長瀬屋鋪

在于同郡同御山之村位山之半復 未由未詳

○五阿彌屋鋪

在于同郡隣郷西一色村松倉山之麓 未由未詳

○泉水殿屋鋪

在于同郡同御江名子村 未由未詳

○畑殿屋鋪

在于同村 往古畑六郎右衛門尉安高居所ノ地跡也 未由未詳

○比留殿原

在于同郡中八賀御相山村 未由未詳

○猿樂場

在于同郡大八賀郷松之木村往古猿樂ヲ興行セシ地跡也

○長瀬屋鋪

在于同郡同郷三福寺村 来由未詳

○松亭

在于同郡同郷松本村 往古同郡高山光曜山照蓮寺主釋從純
閑居ノ地家ナリ 八景十境等テ作ル舊記帝ニ載ス

○御所

在于同郡白川郷荻町村 里人云ク往古ハ此地城跡有テ荻町ノ
城ト稱ス其山中ニテリ可有故地也

○野谷庄司

在于同郡同郷野谷村 来由未詳

○山本殿屋鋪

在于吉城郡吉城郷山本村 是天正ノ始大野郡鍋山ノ城主鍋
山豊後守安室住居ノ地也 安室来由古
城ノ部ナリ 里人云安室有故而于茲

塾居ス村民教シテ 山本殿ト稱スト云 其後天正十四年丙戌十月
十日安室此地ニ於テ自殺甚故未分明法名花影慶春居士

○佐渡屋鋪

在于同郡同郷森新村 来由未詳

○宗雲屋鋪

在于同郡古川郷古川町 今ハ圓光教寺ノ境内是也 金森家士
種村宗雲居所ノ地也

○御構

在于同郡小嶋郷大江村字十樂 里人云ク飛騨國司故場中路家
基網卿ノ別業ノ地跡也

○長者屋鋪

在于同郡高原郷下伏谷村 是ハ往古下総州ノ人此地ニ来リ隱レ

任セリ故ニ村民下総谷ト稱セシヲ後世誤リテカク云ルト云フ
又此地ニ三スク之岩ト云フモアリ私呼部ニ載ス

○太子屋鋪

在于同村 往古聖德太子ノ尊像ヲ安置セシ地跡ナリ未由雖不
詳寺院部同郡同御吉田村常蓮教寺ノ譜中ニ載ス

○勾當屋鋪

在于同村 未由未詳

○宗貞屋鋪

在于同郡同郷茂任銀山 往古金森宗貞居住ノ地也此地古銀
山涌出ノ地ナルニヨツテ今モ此号アリ宗貞ハ其ノ銀山ヲ開發セリ
數前ノ産當州ニ來リ住ス天正慶長ノ間ノ人姓始未由等未詳
古窟

○出羽平窟

在于大野郡中八賀郷日面村未由分明ナラス 國説ニ云ク上古
此國ニ宿禰ト稱スル神人アリ此窟ヨリ出現アツテ磐沙夜山ニ住ス
ト云フ凡テ窟中甚タ廣大ニシテ終ニ其ノ限ヲ知ルモノナシ其後窟
中ニ忽々埋没シテ猶谷明ナラスト云ヘ凡今モ松明ヲ携ヘ入ツテ
見ルモアリ中ニ渺々タル廣キ池ト云フ廣キ泥池
アリ是ヲ田ト稱ス硯ト云フ石アリ其杖凡ク滑ニシテ頂ニ窪キ可
アツテ水ヲ湛ヘリ其餘俗ノ口碑ニ傳フル異説尤多猶窟中
常ニ白ク濁リタル水滴落テ自然ト塊リ石ノ如クナレルモノヲ石
乳ト云ヘリ 撰スルニ窟ノ未由國説分明ナラス宿禰ハ人皇十七
世仁德帝ノ御宇飛驒國ニアリ皇命ニ隨ハサルニ因テ官兵ヲ以
誅セララルヨシ日本紀等ニ見エタリ 猶祥瑞部ニ出ス

○ 日面窟

在于同村 此窟ハ直下ニ深キ穴ニテ 底ノ限り計リシラレヌ當ニ
窟中流水ノ音聞ヘリ里人云ク是同御根方村ニ涌出スル処ノ大
清水ト云フハ則此窟水ナリト凡行程一里餘也

○ 西一色窟

在于同郡難郷西一色村 國説云上古民ノ居所也ト或ハ火ノ兩
ヲ恐レテ是ヲ造ルヒ云フ 國名塚家ト稱スルモノ是也古昔ハ州内ニ
其数多カリシカ年ヲ追テ民是ヲ毀テ田畠トセリ故ニ今世
ハ存スレモノ少シ余今窟ヲ見ルニ山際ニ依リテ地ヲ平均シ四面ニ
大石ヲ組上テ上モ又大石ヲ以天井トス外ノ方ハエテ圓丘ノ如ク葉
キタルモノ也南ノ方ニ出入ノ口ツアリ凡四尺四方計リニテ這
テ出スセリヨヨリ本窟マテノ向九尺餘アリ是ヲ行テ本窟ニ

入其窟中ハ凡ニ間四方計リニテ天井ノ高サ九尺餘リアリ四壁
谷大石ノ面ナメラカテル方ヲ揃ヘテ組立タリ天井ハ其幅ニ直ル大石
ニテテ以テ覆ヒタルモノ也猶次ニ出スル窟モ各大小廣狹アルノコニ
テ其趣ニ於テハ大旨斯ノ如シ他州ニ於テモ山方ニハ此窟アリト
云ヘリ近ク隣國濃州ノ山方ニ於テ古窟ヲ見タルニ是ハ本エノ如キ
大ナルモノニハ非スシテ解ク廣サ五六尺四方ハカリアリシ也古ハ廣
大ナルモノモ在リツラメ國名火塚ト稱シテ昔火ノ兩ノ降シキ儲メ
ルト云フ説モ此州ノ俗ト同シ又本エニ於テ村老ノ語りケルハ州内
ニテ或時如此窟ヲ民ノ毀テ崩セシニ則其窟中ヲエテ以テ築ホ
キ固メ四面天井悉ク大石ヲ覆タルモノアリ故ニ此ヲ以テ考コレハ窟
ヲ造ル初メ先ツ其内法ホトエテ以テ築ホキ立テ後四面ノ石壁ヲ組
テ外ノ方モ則エテ以テ築ホキ内外ノ固メ謀調イ終テ後天井石ヲ上

覆イテ其後出入ノ口トテスヘキ処ヨリ窟中ノ土ヲハ取出スナラシ
今世窟中ニ土ノ満名ヲ稀ニ見タルハ人イマタ任居セサルモノ、残
リタルカト云ヘリ左モアルヘキニヤ

○廣瀬窟

在于吉城郡廣瀬郷廣瀬町村 其数ニ窟アリテ窟中凡三
間有餘色凡同前

○高野窟

在于同郡古川郷高野村 数四窟アリテ大窟一ツアリ窟中凡
長五間有餘ニ及ヘリ然ルニ天井ハ唯一石ヲ以覆フト見テリ里人
ノ口牌ニモ馬ニ乘ナカラ窟中ニ出入セント云フ高野ノ大窟ト稱ス
是也右前段ノ窟ト同シ

○平湯穴

在于同郡高野郷平湯村 此地ハ騎鞍カ山嶽ノ麓ニシテ至テ
山中也温泉アリ然ルニ此地ノ廣野ニ古ヨリ空穴多シ其深サ計
リ知リ難シ或云往古地中ヨリ火燃出タル其跡自ラ知ルモノカ

古墳

三千人塚

在于益田郡下原郷下原町 是濃飛ノ國界也古此地ニ一人ノ民
アリ日本廻國ノ行者ヲ己ガ家ニ止メ一宿一飯ヲ施セリ既ニ其負三
千ニ滿ルトキ建ル處ノ供養塔也

○少箇野五輪

在于同郡下呂郷少箇野村 未由未詳

○萬人講塚

在于大野郡難郷七日町村 盲人ノ供養塚也

講作坑
盲作芒

御猿塚

在于同村 庚申ノ由祠アリ

王墳

在于同郡三枝郷中切村 里人口碑ニ傳フル処京家尊貴ノ人
形國ニ於テ終リ給フ其墳墓也凡テ此地ニ古墳多シト云ヘ凡年代
来由未詳又此邊ノ郷ヲ三枝ト云イ村ヲ上切中切下切ト云ルハ
往古此塚ノ上ニ一株三枝ノ大木アリコトヲ民三人諾シテ是ヲ伐レリ
于時伐株ヨリ血流レ塚上頻ニ鳴動セシカハ三民大キニ恐怖シ伐株
ル処ノ枝葉悉ク塚ニ収メテ自是王ノ墳ト崇メタリ三人ノ民住居ノ地
ヲ以テ此郷村ノ号アリト云ヘリ

首塚

在于同郡大八賀郷五明村 里人云ク天正年中金森法印松倉ノ

城兵ヲ討トリ其首級ヲ埋メシ地也

鍋山石塔

在于同郡同郷松木村 里人云ク是ハ往古當村鍋山ノ城至ラ鍋
山豊後守安室ト云ヒ其父ヲ平右衛門ト云フ信州ノ人也然ルニ安室
嗣子ナキニ因テ同郡松倉城主三木大和守自細カ弟顯細ヲ養子
トス二世豊後守是也其後顯經ハ有故テ兄自細カ為ニ殺サル其
妻女ヲモ捕ヘテ此セ夕岩ノオトリニ於テ殺害セシカ其子靈童ノ黒
キ蛇ト化シテ甚タ祟リヲナセシト云通此邊ニテ其蛇ヲ見タルモノ
必腦サレスト云古又ナシ故ニ俗呼シテセ夕島ノ鐵漿蛇ト云ヘリ顯細横
死ノ後鍋山ノ一跡ヲハ自細カニ男秀細相續ス三世豊後守是也
天正年中父自細飛州没落ノ時秀細ハ信州ニ落行トテ途中ニ
於テ土民ノ為ニ殺サルト云フ然ルニ延室年中ニ至テ當村民ニ平野

清心ト云フモノアリ清心ハ鍋山ノ本氏信州ノ子野氏同姓ノ子孫也或夜夢中ニ女姓一人来テ清心ニ告テ云ク我ハ舊ノ鍋山ノ主也我カ白骨父ニシテ夕宮ノホトリニ沉淪ストイヘ凡終ニ供養スルモノナシ汝速ニ吊ヒ得サセヨト云テ去シリ清心曾テ信用セアリレガ又同告既ニ三夜ニ及シカバ怪ト思ヒナカラセ夕宮ニ行テ夢中ニ告シアタリノエテ穿テ見タルニ果シテ白骨ヲ得タリ仍テ口碑ニ傳フル処ノ豊後守顯綱カ室家此地ニ於テ害セラシ其己灵ノ告タルヲ知リ則同郡高山雲霧寺曹洞宗海蔵山第十五世脫山禪和尚ヲ請ヒテ彼夫婦ノ為ニ如法ノ追福ヲ執行シ建ル處ノ石塔是也室家ノ姓氏来由等未詳 ○碑面之法名ハ大學子秀綱居士鐵山戒心大姉

○三澤墓

在于同郡久々野御宮村 是三木刑部大夫國綱入道三澤カ墓也

天正十二年甲申九月七日 當地山下ノ城ニ於テ金森法印カ為ニ戦死ス法号龍光院高岸三澤居士碑面同所神護山大幢禪寺ニアリ猶来由古城部ニ載ス

○龜塚

在于吉城郡廣瀬御廣瀬町 廣瀬ノ大塚ト稱スル是ナリ 来由未詳至テ方圓ニ築キ其上ニ又圓丘一段アリ

○飯塚

在于同村 来由未詳

○千人塚

在于同村 来由未詳

○御墓

在于同郡吉城御八日町村 是同郡高原御諏訪城至江馬

常陸守平輝盛墳墓也来由古城部ニアリ

○十三墳

在于同村 是江馬輝盛戦死ノキ其家臣川上縫殿次和仁備中守川上左衛門神代ヲ始累代ノ家士十三人同呼ニ於テ討死セリ其墳墓也

○七人墳

在于同郡同郷西門前村 来由未詳

○婦小路墳

在于同郡同郷鶴巢村 里人云ク故婦小路家ノ墳墓ナリトイヘ此レモナク山ノ平ノクナル所ヲサシテソレト稱スルニ其名字法稱等里人ノ口碑ニモ傳ハラサル也

○三墳

在于同郡古川郷古川町 来由未詳

○上人墳

在于同村 来由未詳

○五阿弥墳

在于同村 来由未詳

○烏帽子墳

在于同郡同郷是之里村 往古ノ首塚ナルト云ヘリ

○御所墳

在于同郡同郷中北村 来由未詳 或云總テ古川郷ハ故國司御小路家累代ノ居城アリ其居所ヲサシテ稱ノ御所ト稱ヌト云ハ是國司ノ墳墓ナルカ猶此地ニ飯森墳 富墳 地藏墳 小豆墳 平墳 經墳 堀墳 蛇墳 ト云フアリ 各来由ニ於テハ未考

○ 不動院墳

在于同郡高原郡雙六村 里人云ノ昔修驗者不動院ト云フアリ
其墳墓也

古尾

○ 三佛寺尾

在于大野郡大八賀郷三福寺村 里人云ノ此地ニ古昔三佛寺ト稱ス
ル禪刹アリ其後永正大永ノ頃ニ至テハ寺ハ廢セシニヤ三佛寺ノ城ト
ナレリ此地郷ノ山上ニ今ノ俗塔屋鋪跡ト稱スル其土中ヨリ出ル尾
アリ何レノガカ共火ニ罹リ各燔碎クルモノ也全備セシモノヲ未見ス
其表ニハ籠目ノ地紋アツテ裏ハ恙ク布目アリ也古物ト見エタリ
按スルニ本土ニ宮祠藏經文ノ後書曰貞治三年甲辰孟秋七夕後
書于飛州中八賀郷寶雲山三佛禪寺西向寮畢又吉城郡太

江村南光山壽樂禪寺藏大般若經末書曰大永元年辛巳三木殿
ハ三佛寺在城也以上

○ 塔腰尾

在于吉城郡古川郷古川町字上所 里人云ノ昔此地ニ大塔一
基アリ其尾也故ニ此邊ノ小名ヲ塔ノ腰ト稱セリ今モ邊上底ヨリ
堀出ヌアアリテ平尾名尾共ニ出ルト云ハ凡全備スルモノハ稀也尾テ
表ニハ籠目或ハ簾目ノ地紋アツテ裡ハ各布目アリ其色青ク其
性至テ堅ク重ク古物ト見エタリ

國士姓名黨類并紋傳有無附黨類未考之分

○ 姉小路黨

按スルニ凡テ國士ノ家系等未詳故ニ今其黨ト稱スル処モ本土所
在ノ書ニ據リ或ハ國人ノ口傳ニ傳フル説ニ随ツテ載ルノ紋傳

猶未分明也自是以下可推知之也 ○ 姊小路中納言藤原基

綱敘傳未詳或云丁子或八櫻花 同中將齊繼 同左女將濟俊 同左中將特言

同元綱入道明山 同宰相尹綱 同賴綱 同尹綱 向右近大夫

同新乎 小島右近將監時光敘傳未詳或云斐 同基賴 同左兵衛

佐 同宮内少輔 小鷹利伊賀守 同右京亮 牛丸又太郎

重親家幕ノ敘一ツ巴或五德 宛ノ立モノ日ノ九三牛ノ字 同又太郎綱親 同藏人親吉 同横津守

同備前守 同甲斐守 同一郎 同又右衛門政親 同左馬允

重清 同二郎右衛門親次 同對馬守 同相模守秀次

渡邊筑前守家幕ノ敘三星一ノ字 九ノ内花此花未分明 同主水 山賀新兵衛

○ 江馬黨

江馬小四郎平輝經家幕ノ敘三星或八根世 同常陸少時經 同左馬頭時盛

同右衛門大夫重成 同常陸守輝盛 同小四郎 同右馬允 同左

馬允 同少次郎 同治部大夫 同左兵衛佐 同左右衛門

磨生野次郎大夫右衛門大夫平直盛家幕ノ敘三星菊 同磨之進慶盛

川上河内守家幕ノ敘巴或桔梗 同中務丞 同佐渡守 同上野守 同石見守

同左京進 同善介 同用介 同四郎兵衛 同伊豆守 同縫殿介

同式部 同久次 同少三郎 同十九神代 家幕ノ敘巴或八桐

和仁孫右衛門備中守吉元家幕ノ敘桔梗或六蝶 同備中守勝雅 同淡路守

同三河守 同出羽守 同刑部丞 同九郎兵衛 同除兵衛 同

農左衛門 山田右衛門尉家幕ノ敘巴 大島左近少 寺林甚四郎

同大藏 鎌崎次郎 一瀬清四郎 警見文四郎家幕ノ敘菱桔梗

昭四右衛門七家幕ノ敘田ノ字或巴 中山彌四郎

○ 二木黨

三木忠右衛門藤原正頼家幕ノ敘四目結 酸梅水 同右京進久頼 同忠右衛

門細頼 同修理亮重頼 同右衛門尉大和守直頼 同右京大夫良頼入道雲山 同新九郎頼一 同新介 同左門長門守久細 同右京大夫大和守自細入道久安 同六藏 同右衛門督顯細 同右衛門督信細 同忠次郎金九衛門秀細 同基頼 長頼甚乎拍紋 川虎新之丞利廣九曜 細江路右衛門本松 同大郎九衛門 同牛之介 同季勝 土川肥前守蘇紋 同新三郎 藤瀬新藏 小林石左衛門紋三 船坂路次右衛門世紋 荒井四郎右衛門 内記喜介 藤寄彦三郎 同小七郎

○金森黨

金森五郎八源長延入道素玄家幕紋梅鉢龜甲 同喜三出雲守可重 同五郎八長光 同忠次郎長則 同飛騨守重道入道宗和

同甲斐守重次 同出雲守重頼 同内匠可次 同左京重勝 同左兵衛重義 同山城守重澄 同長門守頼直 同大寺重光 同釋直心 同傳八重熙 權律師祐盛 同頼母重直 同帶刀範明 同大膳可俊 同右近重則 同市正重秀 同飛騨守頼業 同左京直教 同采女真清 同至水重矩 同出雲守頼普 同掃部公可憲 同宗貞 佐藤六右衛門秀房 石微白 雄打 飯白 阿波賀 根尾 田能村 篠侯 長屋 西脇時枝 大野 石神 棚橋 垣見 種村 田口 石崎 松崎

○鍋山黨

平野右衛門尉 同將監 鍋山豊後守安室 同左近介 同新左衛門 同豊後守顯細 同豊後守秀細

○廣瀬黨

廣瀨

同今

如藤

一宮

女尉

同豊前

鹽屋

同島上

因幡

同河内

同躰

備前

推名

衛門

同好

鮎崎

安藤

原雅

新九郎

園部長右衛門尉元成 田近越中守 同因幡守 都行玄蕃
池田織部 東相模守 同甲斐守 園本豊前守 山田紀伊守
伊藤石見守 古川左衛門 上田掃部 時政 五十嵐少左衛門 友時
大坪次吉 同跡五作 奥田右京 遠藤三郎 柏原源右衛門
柏葉田面之介 田口玄蕃

○高山番城交代之式

本上高山ノ城至金森出雲守頼時ハ元禄五年壬申九月辰
台命出羽州上ノ山ノ城ニ得替又故ニ高山ノ城ハ加賀宰相細紀ニ
預ラル則番手ノ人数ヲ出シ家士永井織部ヲ以テ城ヲ請取ラシム
總人数壬申九
廿三高山来着 關東ノ郡代伊奈半十郎飛州御代官ヲ兼テ一國ノ
御村ヲ請取預ル 高山来着 于時御目付淺野伊左衛門 命ヲ奉シ
于壬申十月朔日高山ニ来着シテ同日卯刻城ヲ賀士三引渡セ

リ當日城入ノ人数其式ノ大旨ヲ載ス ○徒目付二人 ○使番一騎
平田清元衛門 高五百石役料百五 ○鐵炮三十挺 持足燈 王藥箱四荷
持人 足輕十二人小頭六人 鐵炮頭一騎中村宗右衛門 高千石役料百五十五石
人数七人 給一人 與力三騎多田宗七郎 高百石 富永源兵衛 堀野
崎介之進 堀 ○弓三十張 持足輕 箭筒四荷 持人 足輕十二人小頭六
人弓頭一騎橋爪縫殿 高五百石役料百五十五石 與力三騎 岡田甚右衛門
高百五十石 野虎七左衛門 高百石 山田忠三郎 高八十石 ○長柄三十本 持
人数六人 小人十二人小頭六人長柄奉行二騎大橋九郎兵衛 高千石人数廿三人
甚原元兵衛 高八百石人数 十九人馬一匹 ○先手頭四騎 兼火指 苜蓿卷 圖書 高千石
数廿三人 給一人 中川長吉 高千石人数 廿三人馬一匹 安宅覺左衛門 高五百石人数
一人馬一匹 大島六之允 高六百五十石人数 十七人馬一匹 ○武具奉行四騎 岡田伊右衛門 高三百石
人数 水野孫之進 高二百石役料 飯尾與八郎 同森田光衛門 高四百五十
十人 人数 十人

○押大銀糧米奉行一騎後藤治右衛門 高三百石役料百五十五石人數十二人 同諸役

人等以上ノ人数八大手總門ノ内ニ扣テ櫻門ノ外左右ニ備ヘリ自
是以下城代人備也 ○後目付二人○大目付一騎中村為兵衛

高百五十石役料百五十五石人數十五人 歩士二十人 ○馬廻組十騎羽田帶刀 礪砥森田小
九衛門 高四百五十石 西村孫九郎 高四 大島六郎九衛門 高三百五十石 寺西庄兵衛

高三百 神田善兵衛 高三百 平松友之九 高二百 大野主膳 高百五十 湯原
長十郎 高百五十 岡田九兵衛 高三百五十 ○使番頭一騎湯原源七郎

高千六百石役料二百石人數三十三人給人一人馬一匹 使番一騎中村藤九衛門 高三百八十石役料百五十五石人數十三人
○會所奉行二騎中村四兵衛 高三百 高田作右衛門 高二百五十石役料五十石

○普請奉行二騎麻生治郎九衛門 高二百五十石 丹羽佐九衛門 高二百
幕攬四荷 八人 足輕十六人 幕帶串四荷 八人 足輕八人 陣送四荷

八人 足輕八人 幕奉行二人 溝口徳十郎 下田金石衛門 大工頭一人

大西平右衛門 大工 同道具言 持 足輕二人 足輕目付四人 小人目

付四人 後目付四人 ○鐵炮三挺 持足輕三人 弓二張 持足輕二人 玉藥篋

一荷 持人 箭筒一荷 持人 長柄鎗二本 持人 傘一本 持人 持

簞一本 持人 兜懸 持人 馬二匹 長刀一振 持人 若黨十五人 歩士四人
給人二人 ○城代永井織部 高二千三百石役料二百石人數六十三

与力五騎 中村源八郎 高百石 河地仲右衛門 高百石 堀 中川又右衛門
堀南郡小左衛門堀 長島源九衛門堀 ○押大銀糧米奉行

一騎鈴木助九衛門 高三百石役料百五十五石人數十人 同諸役人 醫師木道二人 白井
玄周 書本 玄美 外科一人 野尻玄庵 馬醫 瀨木重兵衛 以上ノ

人数八本城櫻門ノ内玄関ノ前左右ニ備ヘリ ○于時淺野
伊左衛門 伊奈半十郎 登城又相續テ 永井織部 湯原源七郎
中村宗右衛門 橋爪縫殿大橋九郎 兵衛 甚原九兵衛 葛巻苗書

中川長吉 以上八人ハ此時衣服ヲ改メ袴ヲ着シ登城ス 安宅覺左衛門大島三之允馬廻組
 十人一同ニ登城金森家士七人本城ノ竹之間廣列居セリ扱
 伊左衛門書院ニ着座半十郎侍屋織部ヲ初メ頭分七人大目付
 使番ノ輩ヲ召出し一統ニ嚴命ノ趣ヲ申渡セリ則織部 衛
 請ヲ申上頭分四人 大目付一人 馬廻五人ヲ召連シ竹ノ間ニ出テ金
 森家士ト代ル家士出城織部帰坐ノ氏湯原源七郎 熨斗三才ヲ持出
 テ備フ會釋終ツテ兩人即刻退出也其後警固ノ諸勢凡千六十
 餘人城入シ畢又猶城外ニ殘ル總員數ハ不載之自是每歲五月
 十月ヲ以テ交代ノ期月ト定メリ ○同六年癸酉五月朔日番手
 ノ人数城代 藤田平兵衛 高百七 同与力五騎丹羽茂左衛門 高百五
 中村庄兵衛 高百二 米原七左衛門 高百 角尾吉兵衛 高百 那古屋市之
 允 高百五 番頭阿部基右衛門 高百 鐵炮頭岡田喜六郎 高百九

同與力三騎 保村五左衛門 高百二 早崎覺右衛門 高百五 半田金之允
高百 弓頭吉田太夫 高百 同与力三騎 神戶半太夫 高百 半田市太夫
高百 横地勘左衛門 高百 長柄奉行上木平右衛門 高百 生駒一右衛門 同上
 先手頭 兼父 杉浦吉藏 高百八 青地弥四郎 高百 高島彦之允 高百五 奥
 村半七郎 高百 使番頭村田三郎 高百八 使番直田治兵衛 高百六
 前波久兵衛 高百二 土藏奉行山崎傳左衛門 高百五 野村甚之允 高百
 普請奉行今村源大夫 高百二 堀孫左衛門 同上 會所奉行木村善之允
高百二 瀨川半兵衛 高百 馬廻組池田治部左衛門 高百五 小幡治部之允 同上
 川島九門 高百三 不破權之允 高百七 永原藤七郎 高百五 一色覺右衛門
高百四 大脇弥左衛門 高百 少野木六之允 高百四 不破三平 高百二 平松弥兵
高百五 衛 醫師 鮎千秋 玄昌 安福以春 馬醫長池傳右衛門等
同上 以上此外總人數 城代津田末馬 高百二
 數前年ノ如シ ○同年上月十日番手之人數

同与力五騎 脇田九九衛門 高百五 德田勘无衛門 高百二 津田源内 高百
岩野市右衛門 同上 三島喜大夫 同上 番頭長屋平无衛門 高九 鐵炮
頭津田治兵衛 高十 同与力三騎 園傳吾 高百二 渡部源之允 高百五
森九兵衛 高百 弓頭茂木傳右衛門 高百三 與力三騎 平野彦右衛門
高百五 林治郎无衛門 高百二 青木又七郎 高百五 長柄奉行 岡島傳藏 高
高百 富永權之介 高十 先手頭 兼火消 半田治大夫 高百 津田五无衛門
高百 金森源八郎 高百六 生駒傳介 高百五 使番頭 板垣山兵衛 高百三 使
番成瀬内右衛門 高百五 大目付大橋長兵衛 高百七 武具奉行 栗田
傳兵衛 高百二 村井養右衛門 同上 土藏奉行 今枝伊兵衛 高百五 山田
八郎兵衛 高百二 會野奉行 鶴見三之允 同上 武藤庄右衛門 同上 普請
奉行 和多田八郎兵衛 高百二 原長七郎 高百五 馬廻組 中村平无衛門
高百五 木村傳助 高百四 千秋孫兵衛 同上 浅野長八郎 高百三 田部助太

夫 高百三 服田彦兵衛 高百三 竹田孫助 同上 伊藤權六 同上 大仙茂左
衛門 同上 勝尾伊右衛門 高百二 醫師 上田玄養 板垣玄且 外村野野
德由馬醫 渡邊所兵衛等 ○同七甲戌年五月朔日番 千之人
数 城代 野村五郎兵衛 高百四 同與力五騎 原十无衛門 高百 岡
田甚无衛門 高百 番頭 村
安无衛門 高百六 鐵炮頭 堀勘无衛門 高百四 同与力三騎 堀馬无衛門
高百二 國府百助 高百七 中村弥八郎 高百 弓頭 山本林伊无衛門 高百四
同與力三騎 長柄奉行
中村新兵衛 高百五 堀平馬 同上 先手頭 兼火消 一色數馬 高百三 野村
傳大夫 高百八 岡七兵衛 高百六 笹島平无衛門 同上 使番頭 前田兵右衛門
高百四 使番 大久保半兵衛 高百四 大目付 恒川七兵衛 高百七 武具奉行 島
田勘兵衛 高百三 前波長十郎 高百五 土藏奉行 簡間九良兵衛 高百三 角

尾伊織 百石 會呀奉行根来九兵衛 百石 齋藤市之允 同上 普請奉行廣瀬
 市兵衛 高二百 五十石 城戸傳右衛門 高二百 八十石 馬廻組青木權八郎 高五百 百石 河野半之允
 同 宮崎宇右衛門 高六十 百石 前波義右衛門 高三百 五十石 浅野与一郎 高三百 百石 今村瀨兵衛
 高四 百石 津田市郎左衛門 高三百 百石 細井藤太夫 高四百 百石 玉木團助 高三百 百石 少西五右衛門 同上
 醫師吉玄叔中島升卷外科能勢伯元馬醫石黒伊左衛門等 前外人數等
 ○同年十月朔日番手之人數城代山崎源五右衛門 高四百 同与力五騎
 土屋甚十郎 高二百 原田佐右衛門 同上 村金六郎 高五百 齋藤平太夫 同上
 安竹佐左衛門 高百 番頭小堀左兵衛 高二百 鐵炮頭富田四郎兵衛 高五百 五十石
 同與力三騎水野久左衛門 高百 坂井與兵衛 高百 前田藤左衛門 同上 弓
 頭里見治左衛門 高六十 同與力三騎筒井三郎右衛門 高五百 永井小右衛門
 高百 半田金之允 同上 大目付津田定酒 高六十 使番頭不破覺之允 高五百
 便番渡邊喜左衛門 高五百 長柄奉行打井勘右衛門 高百 元窪田喜右衛門 高五百

石百 先手頭 萬火消 溝口十郎兵衛 高十七 横濱與八郎 高六十 千福源左衛
 門 同上 高山藤左衛門 同上 武具土藏奉行國府仙右衛門 高三百 五十石 青木
 虎之助 高百 普請奉行奥村造酒之允 高二百 五十石 渡部甚左衛門 同上 會呀
 奉行坂井忠左衛門 高百 恒川又助 高百 馬廻組如藤傳右衛門 高四
 堀二郎八郎 天野少源太 高三百 八十八石 山東治五右衛門 高百 山本又九郎 同上 別呀
 半太郎 高三百 五十石 大島伏太夫 高四 澤田源左衛門 同上 如藤彌一右衛門 高三百 五十石
 多田六之介 同上 醫師小出雲碩中島養仙外科料不破林菴馬醫不破
 傳兵衛等 前外人數等 〇同八年乙亥三月城ヲ毀テ捨ヘキ 旨再宰相
 網紀ニ 命ヒラル 仍テ人夫ヲ増シ加ヘテ城廓ノ家屋石壁ニ至ルテ悉
 シ破セシメ其地ヲ治所ニ引渡シ番手ノ輩ハ賀州ニ帰レリ番城ノ年
 數既ニ四年 元祿五壬申ヨリ同八乙亥年ニ至ツテ終リ畢リ又
 飛州志卷第之七終

Vertical text columns on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The text is faint and difficult to decipher, but appears to be organized into several columns.

附錄共拾卷之月

十一之頁
九六

